
エヌ・オーGIFT2

神代家家長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エヌ・オーGIFT2

【Nコード】

N1763Q

【作者名】

神代家家長

【あらすじ】

エヌ・オーGIFTからの続き。

プロローグ（前書き）

色々間に入ってしまったましたがエヌ・オーGIFTの1と2は上下巻のような関係になっています。

プロローグ

季城由沙子の事情

日向正樹が行方不明になって早一年以上の歳月が過ぎていた。

「はあゝあ」

私は溜息を吐きながらノツソリとベッドから起き上がり猛烈な脱力感を覚えながらも部屋から出て洗面所へと向かう。

「おはよう。 由沙子」

「・・・おはよ」

普段通りの挨拶をしてくれる母さんにポツリと挨拶を返してからシャワーを浴びて着替えを済ませる。正直、私は自分が低血圧である事を最近自覚した。以前はそれどころではなかった——というか正樹の奴を迎えに行くのに躍起になっていた為そんな事に気付く暇も無かった。

その正樹が居なくなり私は自分の時間を持てるようになり——何もかもがどうでも良くなってしまった。

「はあゝあ」

「もう。 幾らなんでも、もう少しシツカリしなさい。 まーくんが居ないからってあなたにはあなたの生活があるんだから」

「・・・わかつてる」

正樹が居なくなつて変わった事と言えばもう一つ。 あれだけ正樹を気に入っていた母さんが正樹の話題を一切口にしなくなった。 私に気を使つて、という事なのかもしれないが私にはそれが気に入らない。 母さんにとって正樹はその程度の存在だったのかと疑つてしまう。

「それじゃ行つてきます」

「はい。 行つてらっしゃい」

けど、そんな事は既に口論も尽きていた。私はいつも通り母さんに見送られながら学校へ出かける事になった。

季城由沙子、大学1年生。

正樹が居なくなつて氣力を喪失した私だが、そのお陰でやりたくもない勉強を暇潰しにしてしまい——結果、正樹が居た頃とは2つ程レベルが高い大学へと進む結果となつてしまつていた。断言するが正樹がどう頑張つたところで入学出来るレベルではない大学だ。つまり私にとって正樹はそれだけの負担だつたという事になる。

「だからって嬉しい訳じゃないのよね」

良い大学に入つて良い職に就く。それが私の人生のベストの選択である事は言われなくても分かつている。でもベストの選択「私の幸せという訳ではないのだ。

正樹の居ない日常は私から活力という物を根こそぎ奪い去つてしまった。当然か。正樹をビシバシ指導しながら日々を過ごす事が私の生き甲斐だつたのだから。

「はあゝあ」

三度溜息を吐きながら私は学校の校門をくぐり大学の構内へと入っていく。

本当、最近の私は一体何をやっているんだろう？いや大学生としてやるべき事はちゃんとやっているのだ。少なくとも人並み以上にでも私はそれでは満足出来ない。正樹というカンフル剤がないと私の日常に彩りが生まれてこないのだ。

そう。正樹は私にとってのカンフル剤だつた。

どんなに言い繕つても（言い繕っていないが）正樹という超劣等生が居なくなつたお陰で私は私の生き甲斐を失つてしまった。

「あの馬鹿が居なくなつて初めて気づくあの馬鹿の重要性か」

正樹が居る時、私は常に正樹をグイグイ引っ張つて主導権を握つ

ているのだと思っていた。否、実際に主導権は握っていた筈だ。なのに今の私が途方に暮れてしまっているのは――。

「ああ。駄目。これじゃ駄目よ」

最近、気が付くと正樹の事ばかりを考えてしまっている。行方不明になったのは正樹だけではないというのに全く薄情な事だ。

「でも勇玖の奴は心配しなくても大丈夫だと思ふのよね」

あいつはあいつで馬鹿な奴だけど正樹と違ってシッカリしている奴だ。だから多分、否、間違いなく私の助けを必要としていたのは正樹の方だった筈だ。

「ああ。そっか」

そう結論付けた所で気が付いた。結局の所、私は正樹を助けているつもりで正樹を寄り掛からせる事で私自身のバランスを取っていたのだ。だから正樹が居ないとフラフラと不安定でどうにも行き先が定まらない。

「私って、いつからこんなに弱くなったのかな」

そんなどうしようもない事を考えながら私は校舎の中へと入っていった。

退屈な授業と友達付き合いを終えて家に帰ると何故か母さんがご馳走を用意して待っていた。

「今日って何かあったっけ？」

「んーん。別に」

そういう割に何故か母さんはご機嫌でルンルンに浮かれている。

「まあ良いけどね」

何があつたのかは知らないが別に母さんが一人で浮かれている分には構わないのだろう。どうせ私には関係の無い事なのだから。

「それじゃ私は部屋に戻ってるから」

「ええ。時間になったら呼ぶからね」

「・・・うん」

返事はしてしまったが一体何の時間なのかは良く分からなかった。

私は素直に部屋に戻り、そして——その時間というものが来た。

第一章

日向正樹は世界最強である。

その事実に対して一片の疑いもないが、それはあくまで剣でという範囲内の話である。だが極論から言えばなんに問題にもなっていない。

単純な話、剣を持って戦う日向正樹は世界最強であるという事実は動かないからだ。日向正樹が剣を持っている状態ならば何処の誰であろうが彼に勝てる者は居ない。だから日向正樹は世界最強として間違いはない。

但し――。

「そこに魔術という要素が入ってくると話は別なのよね」

俺の――日向正樹の完璧なる理解者であるエリナ「エル」クライリンクは俺の問題点を取り上げて一つ一つ丁寧に説明を繰り返してくれる。

「人間が誰しも持っている魔力という方向性の無いエネルギーに方向性を定めてコントロールする。それが一般に魔術と呼ばれているわ。さて、お浚いになるけど魔力に方向性を持たせる為の手段は？」

「えっと。詠唱？」

「何で答えが疑問系なのかは後でタツプリ追及するとして、その通り。詠唱によって魔力の方向性を定め且つ魔力というエネルギーを別の要素に変換する事で魔術は成り立っているわ」

それはもうエリナに耳にタコが出来るくらい聞かされた話だ。

「正樹も魔術が使える位には授業を進めた訳だから、この位は常識なのだけど・・・」

「けど？」

「残念ながら正樹を魔術師と呼ぶ事は出来ないでしょうね」

「何で？」

「魔術を使える人間」魔術師ではないからよ。魔術師とはその名の通り魔力を使う術を知る者の意。正樹がいくら魔術を使えても良くても3流。本当の魔術師と魔術で対決すれば100%敗北が待っている」

「それはちよつと困るけど別に問題無いんじゃないかな?」

世界最強として敗北を自分に許す訳には行かないが――。

「そうね。相手が本当の魔術師であろうとも正樹が魔術を使って戦う必要なんてないもの。正樹が剣を持って戦えばほぼ確実に勝てるわ」

「だよな」

伊達に世界最強を名乗っている訳ではない。剣に関して俺は並々ならぬ自信があった。

「でもね。それじゃ正樹は良くても私が納得行かないの」

「え?」

「折角教えた魔術が足手纏いになるなんて我慢がならないわ!正樹、魔術でも世界最強を狙えるようにするわよ!」

「え?え?」

何故か闘志に火の点いたエリナによつて俺はまたもエリナの過酷な授業へと身を染めていく事になったのである。

エリナに授業を受けつつ実を言うと俺達には俺達の目的というものが存在する。俺のもう一人の弟子である花輪流瀬を探し出すという目的が。

「それにしたつて流花さんが情報を持ち帰るまで唯遊んでいる訳にも行かないでしょう?」

そして俺の弟子にして師匠という複雑な関係の花輪流花は現在、俺達とは別行動を取っていた。流瀬の足跡を全く追跡する術のない俺達は少しでも流瀬の情報を求めて大陸最強であつた傭兵団『狼月』

を頼る事になったのだ。

「だから皆で動こうって言ったのに」

「仕方ないじゃない。私お尋ね者なんだから」

結局それが理由として別行動を取らざるを得なかった。別にエリナが犯罪者である訳ではない。単にエリナはクライリンクという国の皇女であつたのだが先日クーデターが勃発して結果、追われる身となっている。

故にエリナを連れて目立つ行動は避けた方が良い。そしてエリナと花輪が別行動を取らざるを得ないなら俺はエリナに付かざるを得ないのが実情。単純に戦闘能力の差という点もあるが他にも色々複雑な事情があるのだ。

「はいはい。無駄口を叩いてないで授業を進めるわよ」

そんな事情を他所にエリナの授業を進んでいく。高度で複雑な魔術の授業。

まず基本的な魔力の要素を説明すると――魔力には3つの区分がある。限界魔力量と最大魔力量、そして魔力放出量だ。限界魔力量は人間が生まれた時から持っている魔力を蓄えるのに必要な器の事。最大魔力量は現在その器にどの位の魔力を蓄える事が出来るか。そして魔力放出量は最大魔力からどの位を一度に使用する事が出来るかの値。基本的に――。

限界魔力量

最大魔力量

魔力放出量

という式になる。

3つの値を等価にする事が理想なのだが人間である以上それは不可能なので如何にその値に近付けられるかが重要になる。

それを踏まえて俺に照らし合わせると――。

限界魔力量は4万弱。

最大魔力量は3千強。

魔力放出量は1200前後。

という値になる。

これは魔術師からすると途轍もなく貧弱な値と言わざるを得ない。魔術には基本3つのランクが存在するのだが、一つは低位魔術、魔力を100程度必要とする——というか100前後の魔力で発動する魔術の総称を低位魔術と言い、1000前後で発動するものを中位魔術、1万前後で発動するものを高位魔術という。

このランクで比較すると俺は中位の魔術を行使するのがやつとという事になり、やはり魔術師としては低レベルと言わざるを得ない。ちなみにエリナの魔力の3区分は——限界魔力量70万、最大魔力量はほぼ等価の68万、魔力放出量は36万だとか。

エリナが別格である事もあるのだが明らかに俺とはレベルが違う。そもそも生まれ持った器である魔力限界量が70万と4万というのは明らかに俺とエリナの才能の差を現している訳で少々落ち込む俺が居た。

「ほらほら。落ち込むなら最大魔力量を限界魔力量まで上げてからにしてよね。最近正樹の魔力、伸びなくなってきたよ」

「頑張つてはいるんだけど」

「それは分かってるけどね」

何故か嬉しそうに微笑みつつエリナは俺の授業を再開するのだった。

ひっそりと暮らす俺達はその噂を聞きつけたのは恐らく唯の偶然であり、そして歯車の回り始めるキツカケだったのは間違いない。

「冗談じゃないぞ」

その噂は俺を憤慨させるのに十分なものだった。何故ならその内容は——。

『クライリンク元皇女エリナ様。新クライリンク国王陛下と御結婚』
というものだったからだ。

「明らかにこれは私を誘き出す為の罠でしょうね」

「そんな事は分かっている。でも、これだと・・・」

「ええ。クライリンクの革命軍は公的に私を抹殺する手段を取った
みたいね」

この事実は実質的には俺達に影響を与えるものではない。むしろ
エリナが公的に追っ手から開放される事を意味しているのだが――。
「偽者だろうが名前だけだろうがエリナが何処の馬の骨とも分から
ない奴と結婚するなんてハッキリ言って我慢がならない！」

「・・・」

エリナとしては、ここは大人しく引き下がって置いた方が良く
考えているのかもしれない。だが俺にだって容認出来るものと出来
ないものがあるのだ。今回の一件は明らかに容認『出来ない』一件
だった。

「そうね。これは明らかに私達に対する挑戦状。黙って見過ごす訳
には行かないわ」

少しの間迷っていたエリナは、しかし決意の表情を浮かべて言っ
た。

「クライリンク城に乗り込みましょう」

エリナの事情

正直な話をすれば馬鹿な事をしていとう自覚はあった。

このまま冷静に見過ごしておけば追っ手を警戒する事無い暮らし
を手にする事が出来た可能性があるのだ。なのに私は突入を決断し
た。

その理由を述べるなら多分――嬉しかったからだ。

正樹が私の名誉を汚される事に対して本気で怒ってくれていた。

その事実と、もし私の立場を正樹と置き換えた時、私はどう考える

か？正樹が他の誰かと公的に結婚する？

「・・・」

そう考えると正樹の憤慨が私にダイレクトに伝わってくる。

そんなもの容認出来る訳がない！

だから馬鹿な事であると自覚は出来ていても私は——私達はクライリンクへの突入を中断する訳には行かなかったのだ。

クライリンクまでの道程は約5日。

その過程を私達は3日で走り抜けた。正確には正樹が私を抱きかかえて走ったのでかなり早く着いたのだが——。

「ちよつと無理しすぎたかな？」

「だ、大丈夫だ」

そういう割には正樹の息はまだ整っていない。まあ私を抱えて3日も不眠不休で走り続けたのだから無理もない。

「突入は深夜にしましょう。それまでにゆっくり休んでおいて」

「りよ、了解」

この時の私はその判断がベストだと思っていた。だから自分が甘かったと痛感させられるのは、この直後。ひよつとしたら世界最強であると自負する正樹に感化されて私自身に油断があつたのかもしれない。

「エリナ様？エリナ様ですか？」

その聞き覚えのある声は私の背後から響いてきた。ある種の予感に突き動かされて振り返った私の目に予想通りの姿が飛び込んできている。

「マホロ？」

それはクライリンクの城で私付きの侍女をしていたマホロという少女だった。私より少し年上らしいのだが、その性格は好感が持てるものだと記憶している。

「良かった。お戻りになられたのですね。エリナ様の居ない間、私がどれだけ心配していた事か」

私達にゆつくりと近付いてくるマホ口。そのマホ口に対して隣で正樹の警戒心が急上昇するのを感じる。マホ口にはなんら危険な要素はない——筈だったが確信が持てない。今現在、私が信用すべき相手は正樹でありマホ口ではないからだ。故に私もマホ口に対して警戒を強める——のが遅すぎた。

「が！」

瞬間的な出来事だった。

突然マホ口の姿が歪んだかと思うと隣に居た筈の正樹が吹き飛ばされて壁に激突、更にその瓦礫に埋もれて生き埋めになっていた。

「いけませんよ、エリナ様。少々警戒を始めるのが遅すぎました。私はエリナ様の味方ですがエリナ様の御連れ様の味方とは限らないのですから」

「マ、マホ口・・・あなた」

「さあ。行きましよう、エリナ様。長らく貴方を待っている人がお待ちですよ」

私は自身の体内で魔力を体に纏い防御姿勢を取ろうとするがやはり遅すぎる。警戒心を高めていた正樹を一撃の下に沈めたマホ口に私に対応出来る筈が無かったのだ。瞬間的に私は優しく落とされ意識を閉ざしていた。

気が付いた時、私は城の中の謁見の間の近くに座らされていた。

「お目覚めですか？」

そして私の隣にはニコヤカに微笑むマホ口の姿がある。

「ご心配はいりません。エリナ様にはこのマホ口が全身全霊を持って指一本触れさせはしませんから。御貞操の心配でしたら無用ですよ」

「・・・正樹は何処？」

マホ口の口上を無視して私は私にとって一番重要な事を尋ねた。

「さあ？私はエリナ様の侍女ですが、あの方の侍女ではありませんので」

そのマホ口の言い方に段々と腸が煮えくり返りそうになり――。

「まあ、でも随分と頑丈な方そうですね。手加減しませんでしたのに」

「あ」

謁見の間の扉を蹴破って入ってきた正樹の姿を目にして安堵の余り全身から全ての力が抜け落ちそうになった。

「来たか」

そして今まで気付かなかった事が徐々に目に、耳に入ってくるようになる。ここは謁見の間。即ち玉座のある王の間であり、その玉座の座っているのはこの国を力づくで奪い取った革命軍の長である筈だ。

だが、その玉座に座っていたのは――。

「勇玖？」

異世界からのもう一人の客人であり正樹の友人であった坂木勇玖その人であった。

「予想もしていなかった、という顔だな。まあ確かに俺がクーデターを起こすような要素をお前は何も掴んでいなかった筈だし当然と言えば当然か」

偉そうに玉座に座り足を組む坂木勇玖の態度は既に王そのものだった。

「説明が必要と言うなら説明するが？」

「一つだけ聞かせろ」

余裕を持った態度の坂木勇玖に対して正樹が静かな声で一言だけ尋ねた。

「エリナに対して画策したのはお前か？」

「無論だ」

瞬間、正樹の姿が流れるように移動し坂木勇玖の座っていた玉座を真つ二つに断ち切る！

その一撃を余裕で回避していた坂木勇玖は正樹から間合いを計り、その上で致命的な言葉を吐き出した。

「少しは落ち着けよ。そのエリナの命が俺の手にある事を忘れて貰っては困るぞ」

ピタリと動きを止めた正樹を見て私はギョツと唇を噛み締める。足手纏いには絶対にならないと心掛けていたのに、今の私はこの様だ。

「ご安心を。エリナ様に危害を加えるような不届き者はこのマホ口が排除いたしますから」

その私にそつとマホ口が耳打ちしてくる。あくまで正樹に聞こえないような発言は彼女が正樹の味方ではないという証だ。

「それで良い。お前には少し話を聞いて貰わないといけないからな」そして私達を無視する形で二人の対話が始まった。もっとも無視していると云うのは形だけで正樹が私を過剰なまでに気にしているのは分かるのだが――。

「早々エリナ様には近寄らせませんよ」

それは私だけではなくマホ口も感じているらしく動きが取れないようだった。

「まず初めに言っておくが俺はお前の敵になるつもりはない。むしろお前の味方になろうと思っている位だ」

「なら即刻エリナを開放しろ」

「そいつはお前の態度次第だと言っておこう」

玉座から背を離し正樹とある程度間合いと取って対峙する坂木勇玖の態度にはまだ幾分余裕があるように見えた。

「何が望みだ」

「ふむ。そうだな。まずは俺の話を聞いて貰うとするか」

正樹が少しだけ受身になったのを確認して坂木勇玖は両断された玉座に寄りかかり話を始める。

「まず初めに言っておくが俺は強くなった。お前も強くなったみたいだが恐らく俺の方が上だと断言出来る位にはな」

そして坂木勇玖は首元に掛かっていた何かを取り出した。

「その理由はこの石にある。俺は『進化の秘法』と呼んでいるこの

石にな」

それは緑色の石が収まったペンダント。

「この石には人間の進化を促す力がある。無論、全ての人間がこの石で進化出来る訳じゃない。何度か実験してみたが進化出来る人間はほんの一握りと言って良い数だ。その中で俺は選ばれた人間だ」

坂木勇玖の口調に少し浮かれた色が浮かぶのが分かったが、それでも正樹は——私達は動けない。坂木勇玖は兎も角マホ口が全く油断を見せていないから。

「実験の結果だが、この石には特定の人間を進化させる力がある。そして、その進化は一度に限らないという事だ。並の人間は一度の進化で失敗するが選ばれた人間は二度、三度と進化が可能になる。そして俺は既に五度の進化に耐えている。つまり俺こそが選ばれた人間だという事だ」

「一つ聞くが」

高揚した坂木勇玖の言葉に正樹が冷静に質問をした。

「失敗した人間はどうなった？」

「化け物になった。特定の現象ではないが体が異常に膨れ上がり人間とは言えない形容になって暴走したので・・・始末した」

その言葉に私は直感する。少なくとも正樹にその秘法を使えば必ず失敗するであろう事に。少なくとも正樹は選ばれた人間と言うものとは無縁だからだ。

「心配しなくても、こいつをお前に使おうとは思っていない。重要なのは五度の進化を果たした俺と、そしてお前と言う存在だけだ。お前が進化をする必要はない」

その言葉に私はほんの少しだけ安堵した。坂木勇玖も正樹を選ばれた人間であると認識していた訳ではないようだ。

「さて。話は変わるがお前この世界に自分がどうやってきたか理解しているか？」

「・・・」

「そうだな。お前には分かる訳が無いよな？何故ならお前は巻き込

まれたただけだったんだからな。俺に」

坂木勇玖は寄り掛かっていた玉座から離れ少しだけ正樹に近寄る。
「この世界に来る時の黒い流砂は俺を飲み込む為に発生し、それにお前は巻き込まれてこの世界に来た。なら、お前がこの世界に留まるのは不自然だと思わないか？」

「何が言いたい？」

「つまり、だから・・・」

坂木勇玖はさらに正樹に一步近づいて――。

「そろそろ帰らないか？」

『な！？』

正樹と私の動揺が同時に起こる。何故ならば正樹を中心に黒い流砂が発生していたからだ。坂木勇玖を飲み込む筈の黒い流砂が『正樹を中心に』だ。

「言い忘れたが、この力は既に俺の制御下に入っている。本来なら俺を飲み込む為の流砂だがコントロールすれば他の人間に特定して使う事も出来るようになった」

「くー！」

正樹は黒い流砂から抜け出そうと尽力しているが流砂は正樹の手足の自由を極端に奪う上に――流れが速い。正樹はドンドン流砂に飲み込まれつつあった。

それを黙って見ていられるほど私は冷静ではない。

「お静かに願います。エリナ様」

だがマホ口が立ち上がる私に静止をかけて動きを拘束する。もどかしい。この子一人振りほどけない自分自身がとてつもなくもどかしかった。

「正樹――！」

そして私の絶叫も虚しく正樹は流砂に飲み込まれ『また』私の前から姿を消してしまった。

「御安心をエリナ様。私が付いていますので何の心配も要りません」
崩れかける私を支えるマホ口の声すら絶望する私には届いていな

か
っ
た。
。

第二章

はつきり断言すれば俺は勇玖の思い通りになる気などサラサラなかった。

だが俺に意思に反して俺を引きずり込んだ黒い流砂は容赦なく俺を運んで行く。抵抗するどころか手を掛ける場所すら見つからないままに。

そして気が付いたら俺はアスファルトの地面に仰向けに寝転がって星空を眺めていた。

「・・・」

恐らく、そこに転がっていたのは10秒に満たない時間だった筈だ。何故なら――。

「うげっ!？」

俺の頭上方面から光が灯り不吉な音と共にそれが急激的に迫ってきたからだ。その名は大型トラックという。

間一髪必死に転がって轢死は免れたが――。

「勇玖の奴!」

こんな所に送り込んで結局俺を殺す気だったのかっ!

俺はそう憤慨して起き上がり――。

「あんた、そんな所で何やってんの?」

よく知った奴と感動(?)の対面を果たしていた。

久しぶりに会ったというのに何故か物凄く不機嫌な幼馴染――季城由沙子に引きずられる様に歩かされていた。

「大体、何なのよ。あんたのその格好。その髪」

まあ確かに俺の格好は時代劇に出てきそうな和服に袴姿だし髪も花輪に付けられたリボンが装着されたままの状態だ。確かに世間様から見れば不自然極まりない格好なのかもしれないが――。

「ほつとけ」

少なくとも俺は気に入っているのだ。由沙子にとにかく言われる筋合いはない。

「何よ。随分反抗的じゃない。あの正樹が」

「煩いな。色々あったんだよ。色々」

「その色々って奴を聞かせて貰おうじゃない。残さず粗方ね」
「む」

正直な話をすれば話したくない。異世界云々の話は兎も角、俺は既に由沙子の知る俺とは一線を画す存在だ。なんと言っても世界最強で——人殺しなのだ。

「兎に角、話を聞くまで逃がさないからね。この私から逃げられるなんて思わないでよね」

その俺の不安を他所に由沙子は俺を引っ張りながら季城家の前まで辿り着き——少しだけバツの悪そうな顔になった。

「？」

その表情の意味が分からず俺は由沙子の視線を追いかけて——。

「あれ？」

本来そこにあるべき物が無い事にやっと気が付いた。

「俺の家が・・・無い？」

つまり日向家。それが綺麗さっぱり無くなっている。家が建っていた事すら分からない位の空き地になっていたのだ。

「ど、どう言う事？」

俺が聞くと由沙子は気まずそうな顔で視線を逸らしポツリポツリと経緯を話し始めた。

「あんたの両親、少し前に交通事故にあったの。二人とも即死だったって」

「そ、そう・・・なんだ」

正直な話、実感が沸かないという事もあるのだが俺にとって両親とは一番近くにいる他人の事だった。だから俺が気になったのはもう一人。

「青空は？」

「あ。あの子は生きてるわよ。だた、あの子あんたが居なくなつてから抜け殻みたいな生活してたから・・・それで、おじさんの実家の人が引き取つたみたい。家もその時、親戚の人が処分していったわ」

「父親の実家？」

それは俺にとって初耳としか言いようがない。確かに日向という姓は母親のものであるとは聞いていたが父親の実家の話など一度も耳にした事が無い。

「まあ元気でやつてるならそれで良いんだけどな」

「あんたね！」

が。俺の呟きを耳にして黙っていなかった奴が約1名。

「あの子があんた抜きで元気でやっている訳が無いでしょう！どういう頭してんのよ、あんた！」

「あ。いや、でも・・・」

「デモも糸瓜もない！一段落したらあの子に顔見せに行つて上げなさい！良いわね？」

「わ、分かつたよ」

そう言えば昔から由沙子のいう事に逆らえた試しが無いという事を今更ながらに思い出していた。

「まあ、まあ、まあ。まーくん。お久しぶりね」

そして流石に野宿は勘弁と思つた俺が訪れた季城家にて由沙子の母親が過剰なお出迎えをしてくださつた。ちよつと行き過ぎと思う位に。

「あの。流石にこの歳で『まーくん』は勘弁してください」

「良いじゃない。私は昔からまーくんをまーくんと呼んでいたし、まーくんはまーくんでしょ？」

「そ、そうですね」

そして、この人には由沙子以上に逆らえた試しが無い事を更に思

い出した。

「で？結局あんたは今の今まで一体何処で何をしていたっていう訳？」

「それは」

予想していた質問とはいえ、こつも直球で訪ねられると動揺を隠せない。

「まあまあ良いじゃない。こうして折角まーくんが帰って来てくれたんだし追求するのは後にしましょ。今夜はご馳走よ」

「・・・ふん」

超ご機嫌な由沙子の母親とは対象に由沙子はそっぽを向いて始終不機嫌だった。

正直な話をすれば季城家の居心地は悪くなかったが俺としては一刻も早くエリナの所に帰りたいというのが本音だった。

だが、その肝心の帰る為の手段が確立出来ない。

俺には勇玖のような世界を異動する能力など勿論無いし世界を異動するような空間系の魔術は大の苦手で——それ以前に俺の魔力が致命的に足りていない。

帰りたくても帰れない。帰る為の手段の確立すらままならない。

そんな俺のジレンマは——。

「あんた一日中家でゴロゴロしてるなら青空に会いに行つてあげなさいよ」

由沙子には全く全然通じていなかった。

「大体、何をブツブツ呟いてるのよ。傍から見たら危ない人よ。あんた」

「ほつといってくれ」

ちなみに由沙子が言うブツブツ呟いているというのは魔術の詠唱を行っていたのだ。魔力が足りていないのは自覚しているが足がか

りにでもならないかと季城家にお世話になった日から毎日試しているのだ。

まあ当然成果は皆無だが。

「ほら。そんな事より青空に会いに行きなさい、青空に」

「そんな事言われても俺は青空が何処に居るのかすら知らないんだぞ？」

「調べれば良いじゃない。そんな事」

「む」

確かにその通りなのであるが俺にとってはエリナ元へ帰る事が第一の優先事項であり第一どうやって調べたら良いのか検討も付かない訳で――。

「あ。それなら私が調べておいたわよ」

「そ、そうですか」

俺の言い訳がましい言い訳はあっさり由沙子の母親によって破られてしまったのだった。

季城家から電車とバスと乗り継いで丸一日かけた所のそれはあった。

『神代家』

人里離れた山奥にひっそりと――というには少々大き過ぎる門が聳え立ち、そして――。

「何で庭に入ってから2時間も歩いているのに玄関が見えないのよ！」

馬鹿みたいに広い敷地の中にあつた。

「というか何で由沙子まで一緒に来るんだよ」

「あんた一人で辿り着ける訳？方向音痴の日向正樹君？」

「う」

まあ確かに最初は必要無いと思っていたのだが、この広大な敷地

に入ってから由沙子に頼りきりというのが実情。俺一人なら軽く3度は遭難している。

「大体こんな馬鹿でかい家の癖に出迎えに一人も寄越さないなんてどういいう見なのよ」

「アポも無しに着ておいて無茶言うなよ」

住所は由沙子の母親が調べてくれたのだが結局連絡先は分からなかったのだ。

「それにしたって一体いつになったら玄関に着くって言うのよ」

「さあ？」

「まったく！ろくな所じゃないわね。この神代って家は」

正直な話をすれば由沙子に同意だった。俺の父親の実家って一体どんな所なんだが。

結局更に2時間。合計4時間ほどを歩いてやっと俺達は玄関まで辿り着く事が出来ていた。というか俺は兎も角、由沙子がかなり疲労して途中から黙り込んでしまったのでかなり気まずい道のりだった。

「み、水」

遭難はしなかった筈なのに何故か遭難風味の俺達。それに対して巨大な屋敷の門に立つ守衛は一瞥くれただけだった。

「あゝ。悪いけど水貰えない？連れがこの有様で」

仕方なく俺が交渉してみたが結果は変わらず。守衛は今度こそ瞬きもしなかった。

「なんか態度悪いわね。こいつ」

「そういう事を本人の目の前で言える由沙子が言っても説得力無いけどな」

少し休んだお陰か由沙子の方は元氣が出てきたようだが、この守衛は俺達の予想を遥かに上回って厄介だった。

「何で屋敷が目のあるのに野宿しなくちゃなんないのよ！」

「交渉に失敗したからだろ」

「冷静に言っな！大体あの守衛、人の話を聞き流してんじゃないわよ！」

「殆ど罵倒だったけどな」

正直な話、聞き流してくれて良かった。それ位由沙子の罵倒は凄まじいものだった。まあこれだけ歩いて結局野宿では罵倒したくなる気持ちも分らないでもないが。

「あんたも何か言ってやりなさいよ！言いたい事の一つ位あるでしょ！」

「いや確かに言いたい事はあったんだけど由沙子の先に過剰にして言っっちゃうから言っ事無くなった」

「この根性なし」

根性の問題か？と思ったが言葉にはしなかった。触らぬ由沙子に祟り無しだ。

由沙子は俺が近くで取ってきた魚や木の実を調理したものをパクパクと平らげながら更にブツブツと不平を漏らしている。食いながらこれだけ喋れるのも一種の才能かもしれない——などと思いながら俺も食事を勧めていると周囲に複数の人影が立ち上った。

「・・・」

食事をしながら由沙子の愚痴を聞いていたとはいえ俺は別に臨戦態勢を崩していた訳ではなかった。その俺に対して、これほど容易に接近してそれを俺に悟らせないとは——普通の相手ではありえない。

「何か用か？」

俺は由沙子を背後に回し警戒心を高めながら尋ねた。無論、返事が返ってくるなどと期待していた訳ではないのだが——。

「昼間はご無礼を仕りました。青空様の兄上であるとは存じなかったものですから」

一人の人影が近付くと恭しく頭を下げてそう言って来た。

「で？」

「あなた方を丁重に御出迎えするように仰せっております」

「青空にか？」

「無論で御座います」

「・・・」

気に入らない。が、ここは異世界ではない。無闇に戦闘を引き起こせば面倒な事が起こるだけだ。気に入らないが――。

「どうする？」

「そりゃ丁重に御出迎えしてくれるなら野宿よりマシでしょ？」

少しだけ様子を見る事にした。

俺の予想に反して神代家の持て成しは丁重そのものだった。もつとも敵地かもしれない場所で出された物に手をつけるほど俺の警戒心は鈍っていない。

「なかなか良い所じゃない。神代家って」

由沙子はバクバク食っていたが。

それに反して青空への面会を申し込んだが返ってくる返事は型通り『今日は夜分遅い為、青空様は既にお休みになっておられます』というもの。俺達は野宿の準備を始めてはいたが時間はまだ9時にもなっていない。いくらなんでも休むには早すぎるだろう。

その俺の思考に反するように夜10時を待たずに消灯を言い渡された。疲れていた由沙子は反論も無くあっさりと床に着いたようだが俺はこっそりと用意された布団を抜け出し部屋から出る。

この家はいくらなんでも怪しすぎるが、とりあえず当初の目的通り青空に会うつもりだった。しかし部屋を出てから歩き回り俺は自分の失態を自覚した。それは――。

「・・・迷った」

自分が方向音痴である事を忘れていた。

「というかこの家広すぎるんだよ。迷うような広い家を建てるなんての」

俺は愚痴りながらも慎重に歩を進めて行くが警戒するのが馬鹿ら

しいほどに人氣が無い。俺は少々毒気を抜かれながら歩き回り――。

「どうかなされましたかな？お客人」

「――」

至極あつさりと背後を取られていた。

氣が緩んだ？油断した？確かにそれもあつたかもしれないが、この俺に全く氣付かせる事無く背後を取つたのが明らかに『使用人』の格好をした男であつた事がこの上なく不氣味だった。

ここは誤魔化すべきかと思つたが――。

「青空の部屋を探している」

苦手だが少し探りを入れてみる事にした。

「青空様はお休みになられています」

「急な用件が出来た。至急面会を頼みたい」

使用人は数秒考えるような顔をしていたが『私の一存では』と言つて何処かへ行つてしまった。

再び一人になった俺は周囲を目で警戒して回る。

『領域』という技法が役に立ってくれない以上、効率が極端に落ちるが自分の目を使つて周囲を警戒するしかない。

俺は長い時間青空の部屋を探し回っていたが結局その夜は青空の部屋に辿り着く事は出来なかった。

二日、三日と日数が過ぎるが未だに青空との面会は許されない。

由沙子はさつさと順応して寛いでいたが由沙子にも特に異常は見られない。自分が警戒しすぎという事は自覺していたが、どうしてもこの家の空気には馴染めない。

そして四日目の朝。やっと青空に時間が取れたと言う名目で面会が叶う時が来た。だが――。

「お久しぶりで御座います。お兄様」

「・・・」

俺達の前に現れたのは明らかに青空とは言動の掛け離れた――青空とは態度の違う一人の女だった。

「誰だ、お前？」

「お忘れですか？青空で御座います」

「・・・」

確かに青空と同じ顔をしているが、その他の物が掛け離れている。俺はこの女を青空と認識する事がどうしても出来なかった。確かに俺が青空と離れて随分経つが――あの青空からこの変化はどうしても想像が出来ない。

青空とは余り仲が良くなかった由沙子ですら首を傾げている。その位この青空には違和感がありすぎた。

「俺は青空の様子を見に着ただけで青空が元気ながらすぐに帰るつもりだった」

「そうですか。私は元気でやっておりますよ」

その青空の言動を受けて俺は左右を目で確認する。予想通り俺と青空の間を阻めるような位置に領域で察知出来ない護衛が何人が見られた。

俺はその護衛に向けて一動作で踏み込み当身を入れて瞬間的に落とす。二人ほぼ同時に。

「ちょ・・・正樹？」

由沙子は俺の行動に呆氣に取られるが俺は青空の反応が見たかった。周囲のこいつらに何かしら弱みを握られているなら、これですは青空らしいリアクションが返ると思ったが――。

「御乱心ですか？お兄様」

青空の態度はなんら変わるところが無い。もっと広範囲で監視をされているのか、もしくは――。

「由沙子！とりあえず逃げるぞ！」

「お帰りでしたらお見送りいたしますよ。お兄様」

青空の言動を無視して俺は由沙子を引っ張って部屋の外に出て走る。

「いきなり何なのよ一体」

由沙子は不満タラタラだが、それでもちゃんと着いてきてくれた。

流石、俺の幼馴染だ。

俺は屋敷の中を走り回るが屋敷で働く使用人達は俺達に気付いていないのかと思うほど俺達を完璧に無視した動作で働いている。試しに何人か使用人を蹴り飛ばしてみたが文句を言うでもなく淡々と立ち上がって仕事を続行し始めた。

「な、何あれ？」

「決定だ。明らかにここはおかしい」

俺達はそのまま玄関まで一直線に走り抜け門を出ようとしたとき

——屋敷の様子が一変した。

「じよ、冗談は程々にしてほしいわ」

「まったくだ」

屋敷の使用人達が先程と変わらぬ表情と変わらぬ動作で——明らかに調理用ではない刃物を両手に持って襲い掛かってきた。

俺は善戦していたが、どうしても苦戦を免れなかった。

使用人達は大した腕ではなく本来なら世界最強である俺の敵ではないのだが『領域』に感知出来ないというだけで俺は普通の5割落ちの力で戦わざるを得なかった。

一つには領域が通用しない為に背後からの奇襲を必要以上に警戒している事にあるのだが、もう一つは殺す事をまだ躊躇っていたのだ。何を今更と思うかもしれないが由沙子の視線がどうしても俺を迷わせた。

背中に仕舞われた神剣『日乃森』を未だに抜く事が出来ないのも同じ理由だった。

故に苦戦して俺達は徐々に追い詰められていった。

「どうしよう。どうしよう？」

屋敷から少し離れた森の一角。そこで俺と由沙子は完全に追い詰められていた。手が無い訳ではないが今の状況から考えて余り有効な手段とも思えない。その状況において——。

「どうやら、ここまでのようですね。お兄様」

青空がゆつくりと歩み寄ってきた。

「大人しく何もせずに帰ってくださいれば良かったものを。何故自分の寿命を縮めたがるのか理解に苦しみます」

その言動を受け俺は今度こそ確認の意味を込めて再度問う。

「誰だ、お前は？」

その問いに対して青空は——青空では絶対にしないような笑みを浮かべて言った。

「『神代家』の当主、青空ですよ。お兄様」

その一言を受け周囲を取り囲んでいた者達が一斉に俺達に襲い掛かってきて——。

「え？」

由沙子の間の抜けた声と共に——。

その全てが細切れになって吹き飛んだ。

「自己紹介というなら、まだ名乗っていなかったな」

銀色の剣を抜き放ち俺は細切れになった無数の死体を見下ろしながらキツパリと言いつつ切った。

「日向正樹。世界最強だ」

もしも言い訳が通用するのなら、どうかしていたとしか言いようがない。

俺が人を大量の殺めた事——ではなく殺める事を躊躇った事だ。

俺は世界最強である事を自分に課し、そして世界最強である事に躊躇うつつもりもない。また俺は個人を救う為に虐殺をする事に躊躇う事を自分に許さず、許されるつもりもない。

故に——。

「俺が迷う事こそ裏切りに他ならない」

次々と襲い掛かる使用人達を俺は一片の容赦もなく一片の躊躇いもなく虐殺していく。俺と使用人達の力量を考えれば領域の有無な

ど些細な事だ。

故に周囲が血に染まろうと由沙子の視線が俺に向けられていようと俺は青空に向けた日乃森を下げるつもりは全く無かった。

「どうやら少し見くびっていたようですネ」

だが青空の言動に動揺は見られない。完全に逆転されたと言いつのに青空にはまだ余裕が見られる。

「それで、どうします？ 実の妹の体ごと私を斬り捨てますか？」

「妹の体ごと？」

その言葉に反応したのは俺ではなく由沙子だった。

「さつきからおかしいと思っていただけ、それって要するにあんたが青空に取付いているって事？」

「さて。それはどうでしょう？」

ククツと笑う青空にはどうしても我慢がならない。このまま青空を斬りつける事も考えたが――。

「斬りたければご自由にどうぞ」

「それって要するに青空に取り付いたあんたは青空が死んでも、また新しい誰かに取り付けるって言いたい訳？」

「なかなか察しの良いお嬢さんですね。人を悪霊か何かと認めているような節に目を瞑ればその通りと言っておきましょう」

そして青空は挑発的に俺に向き直る。そして――。

「どう？ あなたに大事な妹を殺す事が出来るかしら？ 出来ないわよね。でもね・・・」

一歩俺に近付き俺に向けて両手を突き出す。

「私はあなたを殺す事に迷いなんて無いのよ！」

瞬間、見えない突風が俺を包み込む。が、それは目の前の青空から発せられた物ではなく――。

「あはは！」

俺の背後にいつの間にか作られていた黒い穴に吸い込まれる吸気だった。

「ふふ。さつさと吸い込まれてしまいなさい。地獄の穴があなたを

待っていますよ、お兄様」

何だか分からないが穴に吸い込まれたらやばいという事は間違いない。だが、そんな穴に吸い込まれる吸い込まれない以前の話に――。

「花輪流刀術・奥義……」

俺はとつくの昔に――。

「第四秘儀……」

この馬鹿女に対して――。

「第三・干涉！」

ぶちきれていた！

花輪流刀術の奥義『龍型』は4つの要素により構成されている。

一つは無慈悲の攻撃と防御を可能にする『呼吸零』。

一つは極限の運動能力を獲得する『損傷無視』。

一つはあらゆるダメージを無効にする『現状維持』。

そして――『第三・干涉』。

「ふ。何かと思えば私にしがみ付いて時間を稼ごうという腹ですか？」

勘違いした女は俺に両肩を捕まれた事の意味に気付いていなかった。だが好都合。俺は触れた青空の肩を通じて作業を着実に進めていく。

「往生際の悪いあなたには私が直接引導を……」

「黙れ」

「！」

接続完了。

『それは・・・させない!』

「!」

一種の確信に似た死を予感した瞬間、俺の体から光が溢れ一つの形を型作る。

『死なせない。あなたは・・・あなただけは私の全てに懸けて死なせません!』

呆然と見上げる俺を包み込むように『彼女』はそこに居た。

『貴方だけは・・・この私が・・・』

あの時——以前に奥義を使って死にかけていた時も彼女は命を懸けて俺を救い、そして——。

『私が・・・この『ユサリレイシア』が、あなたを守ります!』

「え?」

彼女はずっと俺を守ってくれていた。

彼女の光が俺を包み込むと少しだけ俺の死の予感は遠ざかったが彼女は既に原形を留めない位に薄くなっていた——。

「あ」

俺に夢げにうつすらと微笑んでゆつくりと消えていった。

「・・・」

呆然とする俺は彼女の居た位置にゆつくりと手を伸ばして——背後から猛烈な風を感じた。

「!」

慌てて振り返ると先程青空に取付いていた馬鹿女が作り出した黒い穴が先程の倍以上の大きさになって風を巻き起こしていた。

「最後の最後まで往生際の悪い!」

俺は足を踏ん張り必死に抵抗するが——。

「ごふ!」

血を吐き力が抜ける。『彼女』は全てを懸けて俺を守ろうとしてくれたが、それでも俺の体にとっては応急処置程度の作用しかなかったらしい。俺は自身の致命的な損傷を自覚しながらドンドン黒い

穴に吸い寄せられて――。

「兄さん！」

その声を聞いた。

青空が――あの青空が俺の良く知る青空の表情で俺の良く知る青空の言葉で俺を見て俺を呼んでいた。

奥義に自信はあったものの、その青空の姿を見てなんだか――凄く安心してしまった。

必死に俺の方へと手を伸ばしてくる青空。その手に俺も手を伸ばし俺と青空の手が触れ合う。そして――。

「あ」

俺は黒い穴の中へと吸い込まれていった。

第三章

日向青空の事情

ある日、突然兄さんが消息不明になった日から私の記憶が曖昧になった。

何をしていたのか良く思い出せず何があったのかも良く思い出せない。ただ兄さんが居ないと言うだけで私の心は空虚なものとなり何を感じる事もなく日々を過ごしていた。

そんなある日、両親が交通事故で死んだという知らせを受けた。しかし私の感情には一切の波は立たなかった。元より両親に対してなんら特別な感情を持たない私はその程度の事では全く動じなかった。

そして私は父方の実家であるという『神代家』へと連れて行かれ一人の寝たきりの老婆と面会をした。そして何かが体の中に流れ込むような感触があり――。

その後の事は更に曖昧になる。気が付いたら私は森の中で倒れていた。そして――兄さんが私に手を差し伸べていた。

必死に手を伸ばした。

けど届かなかった。否、届いたけれど触れ合えたけれど兄さんを救い上げる力が私には決定的に不足していた。

結果。兄さんは訳の分からない黒い穴へと吸い込まれて――それと同時に黒い穴も急速に収束して消えた。

「そ・・・んな」

折角会えたのに。やっと、やっと会えたのに――。

「こんなやつてないよ」

私は絶望感で力が抜けて膝を付き、そのまま地面に倒れこむ――その直前。

「ふざけないでよ」

強い力に引きずり上げられた。

驚く私の目に明らかに怒りを携えた由沙子さんの顔が映る。何故この人がこんな所に居るのか疑問が頭を掠めたが、それ以前に――。

「正樹を何処にやったのよ！」

「――」

その言葉が衝撃となって私の胸に突き刺さる。

「冗談じゃないわよ！あいつ・・・あいつ、やっと帰って来たのに！このまま終わりなんて絶対許さないわよ！」

私は胸に突き刺さる言葉を受けながらボンヤリと思い出していた。そう言えば兄さんを失った時から、この人の事だけは少しだけ印象に残っていたという事を。

別にこの人が私の印象に残るような行動をしていた訳ではない。

唯この人も私と一緒にだったから。兄さんを失った事でこの人も日々を空虚に生きていた。だから私とこの人はきつと――。

「兄さん」

「泣いてないで正樹を返しなさいよ！」

涙を溢れさせる私を由沙子さんは強い力で揺さぶる。でも、そんな事をされても――。

「分からないんです。私、どうやって助ければ良いのかなんて分からない！」

「だったら調べなさいよ！」

「え？」

「あんたにしか出来ないでしょうが！あんたがやらなくて誰があの馬鹿を助けられるのよ！」

その言葉が更に衝撃となって私を貫く。この人は私が正気に返っている事をちゃんと理解しているのだ。そして、その上で私に兄さんを救えと言っている。

「・・・」

私はゆっくりと掴み掛かっていた由沙子さんの手を振り解き自分の力で立ち上がる。

「そう。確かに・・・泣いている暇なんて無かったですね」

この人だけは私と同じ悲しみを知る人だから。

兄さんを奪った黒い穴について調べると同時に私にはしなくてはならない事が山ほどあった。

まずは神代家の統括。そして兄さんが惨殺したと言う神代家の使用人達の後始末だ。

だが、この二つに関してはさして問題と言える問題は無かった。

何故なら私は神代家の当主として認証されていて神代家の使用人達は人形だったから。

人形と言う表現は比喩的な表現であると同時に事実を指している。神代家の使用人達は生まれた頃から人形になるように特殊な教育を施され一切の感情を持たず一切の行動を当主の命令のみで遂行している。故に彼らは私の言う事に一切逆らわず、また兄さんが惨殺した死体も淡々と処理してくれた。

神代家の権力が私の想像していたものよりも遥かに大きなものであった事も嬉しい誤算だった。

それ以外にも細かい処理も色々必要になったが私と由沙子さんは専ら神代家の文献を読み漁り兄さんを救う手立てを確立する事に全力を注いでいた。

「・・・」

でも調べれば調べるほど兄さんを飲み込んだ穴の正体は絶望的な

ものだと思い知らされていく。

「何なのよ、これ」

まず、あの穴の正体だが、あれは神代家風の処刑場というものだった。あの穴を通じて神代家に敵対する者に未来永劫の苦しみを与える為の世界へと叩き落す。あの穴は神代家にとつての罪人の牢獄であり処刑場なのだ。

更に文献を読み進めるとその処刑場の状景が段々見えてくる。

一つ。処刑場とは一つの世界として成立するものである。

一つ。処刑場の世界には死の概念が存在しない。

この時点で私と由沙子さんは少しでも希望を見出した気がした。死の概念が無いというのがどういう事か知らないが、つまり処刑場とは裏腹に、その世界では死ぬ事が無いという意味だからだ。

だから兄さんは生きている。その事に私達は希望を持ち――更に文献を読み進めて絶望の文字を刻み込まれた。

確かに死の概念が無いという事は死なないという事に他ならない。でも、それは決して私達の考えるような良心的な見解とは異なる事実だった。

例えば、その世界において腕を失ったとする。

そこで死ぬのは腕と腕をつなぐ境目だ。切断され境目が死んだ事になるが死の概念の無い世界ではそれを覆す。悪意のある方向へ。

具体的にどうなるのかと言うと切断された腕は瞬く間にこの世界から抹消される。そして無くなった腕は瞬時に再生されるのだ。ここまでが良い。

問題なのは再生される腕が『必ずしも本人も物である必要がない』という点。再生される腕はその世界にいる全ての罪人達の平均値で作られる。

だが、この世界が神代家に作られて幾世代も過ぎた今日、平均で腕を作られれば徐々に歪みが出る。結果、その腕は人間とは認識出来ない腕として成立するのだ。

この時点で既に正気の沙汰ではない。腕に自分の物ではない腕を

——異物を無理やり付けられるのだ。この時点で正気を失ってなんら不思議はない。

そして更に文献を読み進め最悪の事実が次々と現れる。

一つ。この世界において食料と呼べる物は皆無である。

つまり、この世界には食べ物が無い。死の概念が無いのだから別に食べなくても死にはしないだろうと思ったが、無いのは概念により死のみであるという事。つまり運動による空腹は健在である事が——消耗は必然である事が書かれていた。

それじゃ一体この世界では何を食べて生きれば良いのか？

「う！」

この文を読み進めた時、私は猛烈な吐き気を覚えた。

この世界には確かに食料と呼べる物は無い。だが食べる物が無いという事とイコールではない。そこに何かが存在するのなら食べられない道理は無い。断言すれば、この世界において食事＝共食いになる。

罪人は罪人を食らい、食らわれた罪人は死の概念が無い為、即時に復活し罪人を食料として求め彷徨う。

食った方も食われた方も死の概念の喪失により異形化が急速に進む。

「こんな世界に兄さんが」

そして私は知りたくない事実を——決定的な絶望を見つけ出してしまった。

一つ。この世界において時間の流れは無情である。

つまり処刑場と私の今居る世界では時間の流れ方が違うのだ。

私にとっての1日は兄さんにとってはその何倍もの速さで流れている。兄さんが黒い穴に吸い込まれてから既に何日も経っている。ひょっとして兄さんにとっては何年という時間が過ぎているかもしれないのだ。

私と由沙子さんで文献を読み漁り、そしてその方法に辿り着くまで結局半年もの時間を必要としてしまった。

その間、由沙子さんは実家に連絡を取り一度も帰らずに私を手伝ってくれた。

そして――。

「これで準備は整ったわ」

今日、兄さん呼び戻す為の儀式が決行される。

成功の確率は恐らく皆無に近いだろう。

私に出来るのは処刑場へと続く門を短時間繋げる事だけ。しかも、その道が兄さんの近くに現れるとは限らない。最悪、兄さん以外の化け物が這い出てくる事も考えられる。

「用意は良いですね？」

「ええ。やって」

でも、それでも私達に中断の文字はあり得ない。兄さんを助ける可能性が僅かでもあるなら、どうして躊躇出来ようか？

『神代の名において命ずる。扉よ開け』

私は意識を集中して徐々に黒い穴を前の前の空間に広げていく。理論は完璧だ。門を開く事が成功するのは分かりきっていた。だから問題は――。

「く――」

その門の維持。

重い負担が私に掛かり意識を失いそうになるが私は歯を食いしばって耐える。この日の為に全てを賭けて来たのだ。こんな事で負ける訳には行かない！

それでも10秒、20秒と時間が経つにつれて私の限界が近付いて来る。そして、ついに限界を向かえ門が閉じ始めた時、一本の腕が穴の淵に掛かる。

「あ――」

私は必死に意識を繋ぎ止め門を維持する。そして期待を込めた瞬

間――。

「ひ！」

私の口から漏れたのは悲鳴に似た驚愕だった。穴の淵にかけられた腕。そして次に『這い出てきた者』は似たものを上げれば巨大な蜘蛛のような生き物だった。その全身が臓器で作られている事を除けば。

人間の腕を無数に取り付けたような腕。そして複数の顔が入り混じった顔。とても人間と呼べるような生き物ではない。なのに何故――その腕の一本に巻きついたりボンに見覚えがあるのか。

「あ。嘘。嘘でしょ。兄さん……」

私と由沙子さんはその場に絶望して座り込む。その私達に向けて蜘蛛のような生き物は手を伸ばしてくる。

しかし、その手が伸ばされた本当の意味を私は知る事になる。

その伸ばされた手は私達を捕らえる為でも捕食する為でもなく――
|。

『た……』

「え？」

『たすけ……て……』

明らかに私達に救いを求める為の手だった。

私も由沙子さんも、その声を聞いて呆然と佇んだ。

この蜘蛛のような生き物が私達に理解出来る言葉を話した事も驚きだが一体何を言っているのか直ぐに理解出来なかったからだ。何故なら少なくともこの蜘蛛のような生き物が、こちら側の世界に這い出している事は間違いなく処刑場から救いを求めているとは考え難い。

なら一体『何から』私達に救いを求めているのか？

その答えを考える前に私達はその事実に向面する事になる。

『ぐぼあ――！』

突如悲鳴をあげて蜘蛛のような生き物が上空へと舞い上がる。その体に銀色の槍が突き刺さっていたと理解するのは後になってからだった。

そして私の開けた黒い穴から銀色の鎖が飛び出して蜘蛛のような生き物に絡みつく。

「いい加減に・・・」

そして恐らく蜘蛛のような生き物を捕らえたのとは反対側の鎖の端を握る人物が、黒い穴の中から――。

「往生際が悪いんだよ！！！」

華麗に飛び出してきた！

銀色の鎖を左手に絡め銀色の剣を右手に持つ――日向正樹が！

季城由沙子の事情

それを見た時、私はなんと言うか改めて――。

『ああ。こいつ馬鹿なんだな』
と物凄く実感してしまった。

だって折角穴から抜け出してきたと言うのに正樹はこれっぽっちも私達に気付いてない。正樹の目に映っている物は蜘蛛のような生き物の腕の一つに絡まったりボンだけ。

だから多分こいつは、あのリボンを追い掛けてここまで来たのだろう。

私達の苦勞なんて知らずに。

上空に舞い上がった蜘蛛のような生き物を鎖で引いて無理矢理引き戻しながら正樹は右手に持った剣を振り上げ蜘蛛のような生き物を容赦なく細切れにした。

処刑場ではどうか知らないが、こちらの世界には死の概念がある。蜘蛛のような生き物は数秒痙攣を繰り返していたが直ぐに動かなく

なつて泡のようになって消えた。

「ふう」

そして蜘蛛のような生き物からリボンを取り戻した正樹はその場に座り込み――。

「ごぼっ！」

「ちよっ！何やってるのよ。あんた！」

盛大に血を吐いて地面に撒き散らした。

「青空っ！早く穴を閉じてしまいなさい！それから正樹を急いで運ばないと！」

「は、はいつ」

私は正樹に近寄り、その身を支えと――再度呆れた。

だって、こいつの体には結局傷の一つもありはしない。一体何をやってきたのか知らないが、この馬鹿はあの地獄の処刑場の中でさえ無傷で生き残ってきたのだ。

でも正樹の容態は良くない。何が原因かは知らないが定期的に血を吐いて苦しんでいる。

私は正樹を抱えて屋敷の方へと移動しようとして――袖を掴まれた。

「・・・ていけ」

「え？」

「つれ・・・ていけ。俺を・・・の所へ」

「黙ってなさい。あんたこのままじゃ・・・」

「俺を・・・アの所へ」

「話は後で聞くから。兎も角、今は安静に・・・」

正樹を落ち着けようと私は必死に説得を試みて――。

「ユサ・・・リ・・・レイシアの元へ」

「・・・」

頭の中が真っ白になった。

青空を通して神代家に車を用意させ私と青空と正樹は今目的地へと向かっていた。

「兄さん、しっかりして」

正樹の容態は相変わらず悪く、明らかに生死の境を彷徨っていたが私は私でそれどころではない事態に陥っていた。

何故、正樹が今あの名前を出したのか？

それが不可解で、どうしても嫌な予感が拭えない。

何か私は致命的な思い違いをしているのではないかという気がしてならない。いずれにしろ目的地に着けばハッキリする事なのだが、どうしても私は不安を拭い去る事が出来ずに居た。折角、正樹が無事——かどうかは分からないが戻ってきて隣に居るというのに私はずっと上の空で窓の外を眺めていた。

目的地に到着するまで結局半日近い時間が掛かった。

その間、正樹は何度も吐血して生死の境を彷徨っていたが案外しぶとく粘っている。何処で何をしていたのか知らないが昔と比べて随分根性が着いてきたものだ。

私と青空は両側から正樹を支え目的地の敷地に入り、私はその扉の取っ手に手を掛けて——動きを止めた。

「何をしているんですか？ 由沙子さん。早く兄さんを休ませて上げないと！」

「わ、分かっているわよ」

そうだ。今は正樹の事が優先の筈だ。私はそう割り切って扉を――

『季城家』の玄関へと続く扉を開け放った。

「……」

私の予想に反して玄関はいつも通りの姿を維持していた。そして――。

「お待ちしておりました」

私の予想通り。母さんが――『季城ユサリレイシア』が恭しく片

膝をついて頭を下げ私達を——正樹を出迎えていた。

私の母さんの名前は季城『ユサリレイシア』。

その名前に疑問を持たなかった訳ではないが生まれた時からその名前に馴染まされてきたのだ。違和感を覚えるのには私達はその名前に馴染みすぎていた。

「さてと。何かからお話すれば良いかな」

私達を居間に案内して座らせた母さんはいつもより更に若く見えた。そこでやっと私は母さんが普段から常にかかさない化粧をしていないのだという事に気付いたのだ。

「初めからよ。一体何がどうなっているのかキッチリ説明して貰うからね！」

「そうね。それが良いかもしれないわね」

母さんは私の言葉に頷きユツクリと事に真相を語り始めた。

ユサリレイシアの説明

私の名前はユサリレイシア。

この名前に嘘偽りは一切ありません。元・神族第二位、神罰級第一位のユサリレイシア。それが私の正体です。

私は神と呼ばれる者の中で2番目の地位と強さを持った神族。でも私はある事情によりその地位を事実上失脚してしまった。その結果、天の尖塔という意味も無い場所の番人と言う立場へと左遷されたのだ。

天の尖塔とは神族の研究がもたらした神秘の秘薬を作り出す工房があった場所の末路。それ故その場所には万能薬の材料である花が咲き誇っているが言い換えればそれ以外の物は皆無だった。

その場所で私はずっと待ち続けていた。高度2万メートル上空、そして過酷な条件を突き付けられるこの場所で誰かがやってくるの

を長い年月をずっと、ずっと待ち続けていた。

そして――。

「最初にその場所へとやってきたのが日向正樹だった」

彼の言動は支離滅裂で矛盾だらけで、そして――この上なく魅力的だった。

彼に付き従い彼を守り続けた日々は私にとって至福であつた事は間違いない。

だから彼が二度目の奥義を使った時、私は迷わず彼の為に全てを捧げる事が出来た。でも――。

「私の力を持つてしても彼の崩壊を止める事は出来なかったの」

元より私は既に肉体という器を失い魂だけの存在に成り果てていた。その魂を持って奥義によって破損した魂を補う事が私に出来る全てだった。

「ちょ、ちょっと待ってよ」

私の説明に由沙子が待ったを掛ける。

「その、さつきから言ってる奥義って何なの？何でそれを使ったら正樹が死に掛けたりする訳？」

「花輪流刀術・奥義『龍型』。それはあらゆる意味で無敵の奥義であり諸刃の奥義」

それは私にとって苦い思い出の蘇る奥義だ。

「明らかに人間の限界を超え神と呼ばれる私ですら一蹴した最強の力を可能にする奥義。でも、その原理は魂のフル稼働を必要とする。本来あり得ない運動を魂にさせる訳だから当然魂に大きな負担が掛かる」

「そ、それじゃ今正樹が苦しんでいるのは・・・」

「ええ。彼は今、奥義の反動により魂の崩壊が始まっているの」

「それじゃ原因は分かっているんですね？なら早く兄さんを治して

ください！」

日向青空が期待を込めた目で私を見るが私は首を左右に振る事しか出来ない。

「残念だけど崩壊し始めた魂を安定させるだけなら兎も角、既に欠けてしまった魂を補う手段は何処にも存在しないの」

肉体ならば時間が経てば治癒が働くし再生も可能だ。

精神にしても様々な方法で融通が利く。

けど魂とは誕生の瞬間から崩壊までの間、一切の回復と言う動作は行われない人の本質そのもの。もし他の物で欠けた魂を補っても、それは魂の変質に他ならない。つまり全く別の魂になってしまう。人は魂が無事である限り肉体、精神を失おうとも転生と言う手段を持って何度でも復活出来る。だが魂を失った者に待っているのは消滅だけなのだ。

「そ、それじゃ兄さんは・・・」

「落ち着いて。まだ手段は残されているわ。その為にも話の続きをしましょう」

そして沈黙した二人を前に私は話を再開させる。

魂の崩壊を少しだけ抑えただけとはいえ私も力を使い果たして自分の消滅を覚悟していた。けど私が流され辿り着いたのは皮肉にも私の神族での地位を失脚させる原因となった神族の『生体兵器研究所』だった。

当時、私はこの研究所に存在価値を見出せず神族の長に何度も掛け合って研究の停止を提案した。実験と称して幾人もの神族が人体実験の犠牲になる事に私が異と唱えたのは当時の私からすれば当然の帰結だった。

だが、その行動が神族の長の怒りに触れ私は失脚。左遷と言う道を辿った。

そして更に皮肉な話、その研究所は当の昔に閉鎖され無人の廃墟と化していた。そして本当に皮肉な事に私はこの場所で一命を取り留める出会いをした。

『3つの培養液が満たされた大きなカプセル』
その中に神族の研究成果の失敗作である生体兵器が収められていた。

識別名・『中戦』のテレミリス。

「つまり、この体をその研究所で手に入れたの」

魂だけとなった私とその体は上手く適合してくれた。恐らく、この試作兵器が失敗作とみなされたのは神族の兵器として起動不可と判断されたからだ。神族が魂のみとなって直接兵器に接続するという事は想定外だったのだろう。

「ちょっと待ってください。あなたの話は分かりましたが一体その話の何処に兄さんが助かる要素があるんですか？」

私の話に再度口を挟む日向青空。

「私は唯単に魂のみの姿になって彷徨っていた訳ではないわ。その姿になりながらも私は彼の・・・日向正樹の欠けた魂の欠片を探して回っていたの」

「あ」

そう。つまり他人の魂で補ったのでは魂は変質してしまうと言うのなら本人の欠けた魂を使って補えば何の問題も無い。

「そ、それじゃ兄さんの魂の欠片は何処に？あなたが持っているの？」

「話を続けるわ」

興奮する日向青空を宥めるように私は話を再会させる。

体を得て一命を取り止めた私は日向正樹の魂の欠片を体の中へと――魂の内側で保存していた。その結果、私ですら想定外の事態が起こってしまった。

恐らく私と日向正樹の魂は何かしら惹かれあう性質を持っていたのだろう。私の魂の一部と日向正樹の魂の欠片の一部が融合して一つの全く新しい魂を作り上げていた。

だが、その魂は魂同士の融合体である為肉体を持たない。このままでは自然消滅してしまうのは必至。その時、私の目に入ってきたのは残り二つのカプセル。残り二つは『中戦』よりも更に未完成だったのか培養液には『近戦』のプレミリアとかかれたプレート、そして――。

「培養前の肉体の細胞が納められていた」

「ちよつと待つてよ。待つて・・・」

「私はその細胞を培養すると同時に新しく生まれた魂をその細胞に定着させ・・・」

「待つてつてば!!」

「そして『由沙子』と名付けて育てた」

ガタン！と椅子を蹴って立ち上がり由沙子は私を目一杯に睨み付

けている。当然と言えば当然の話かもしれない。今まで無意識に慕っていた幼馴染が――。

「そう。肉体的ではなく魂的に日向正樹が貴方のお父さんよ」
実の父親であつては。

でも由沙子はある程度予測していた事態だったのだろう。取り乱す事無く呆然と椅子にストンと座り込み下を向いて思案に耽つていた。

「そ、それで残りの魂はどうなったんですか？兄さんの魂の欠片は」
由沙子がこの状態だというのに日向青空は話の続きを所望してくる。当然か。日向青空にとっては日向正樹が何よりも優先すべき存在なのだから。

「そろそろ予測が付いてもおかしくないと思うけれど培養液が満たされたカプセルは『3つ』あつたのよ」

「・・・え？」

その理由を今から話す事になる。

「その内の一つを私の肉体として。一つを由沙子として。そして最後の体に日向正樹に欠けた魂を定着させたの」

「ど、何処に居るの？」

もう既に予測は出来ているだろうに日向青空は尚も話の続きを促してきた。

「そして彼の欠けた魂を『砲戦』のマリーエンスに定着させた後、赤ん坊になるまで成長させてから私達は一緒に時間を遡り・・・」
「・・・」

「日向正樹の妹として両親の記憶を改竄して預けた」

第四章

朝、目覚めると俺はノソノソとベッドから這い出して階段を下りて洗面所に向かい顔を洗って身だしなみを整える。そして丁度身支度が整った時を見計らったように――。

「おはよう。朝ごはん出来ているわよ」

「ああ。今行く」

『エリナ』に呼ばれて俺は居間の方へと向かう事にした。

既に朝食の並べられたテーブルの一席に着くと向かいに座った由沙子がギロリと俺を不機嫌そうな顔で物凄い視線で睨み付けて来た。それとは対象に――。

「はい。沢山食べてね」

ご飯を山盛りに盛った茶碗を俺に差し出してくる『エリナ』は非常に機嫌が良さそうだった。

「ありがと。いただきます」

それを受け取って俺はモソモソと食べ始めるが――。

「何だか思ったより普通の反応ね？もっと驚くかと思ったのに」

「何が？」

「私がここに居る事」

「別に何も変な事なんか無いだろう。この家に・・・」

エリナの姿を模した――。

「ユサレイシアが居ても」

「ちえゝ。折角サービスしてあげようと思ったのにバレてたんだ。つまらないの」

光を纏った偽装だったのだろう。あつという間に元の姿に戻ったユサレイシアは俺の隣にチョコンと腰掛けるとニコニコしながら寄り添ってくる。

「止めてよね。こんな朝っぱらから」

それに対し不機嫌な由沙子が俺達を軽蔑の視線で睨み付けて来る。
「良いじゃない。今までしたくも無い堅苦しい変装でご近所付き合
いなんてしてきたんだから。これからは生きたいように生きるの」
ユサリレイシアの言う変装とは彼女の常日頃からしていた化粧の
事だ。彼女は老いを誤魔化す為に化粧をしていたのではなく――。
「この体は歳を取らないからね。ご近所様を誤魔化すのが大変だっ
たわ」

若すぎる体を誤魔化す為の化粧だったのだ。

「さっきみたいに光を纏って変装すれば良かったんじゃないのか？」
「幾らなんでも無理よ。この体には魔力の増幅作用があるけど、そ
れでも私の魔力は以前とは比べ物にならないほど低いのよ？短時間
なら兎も角、年中変装しなくちゃいけない状況じゃ役に立たないわ」
「そうなんだ」

俺はある意味家族団欒の朝食を楽しみながらの朝を迎えていた。

昨夜。真相を知った由沙子と青空の反応は綺麗に対照的だった。

由沙子はユサリレイシアの話に反発を顕にし――青空はこれ以上
ないほど簡単に事実を受け止めた。

「あの子にとっては、ある意味理想的な展開だったしね」

ユサリレイシアが語るには一つの魂として成立した由沙子なら兎
も角、欠けた魂の集合体である青空は俺に対して異常に依存度が高
いのだから。

「でも俺、昔は青空に避けられていたけど」

「それはあの子が避けていたんじゃないくて、まーくんの方が寄り付
かせなかっただけでしょ？あの子はまーくんの事に関して敏感だか
ら本当は近寄りたくても近寄れなかっただけよ」

青空は言い換えてしまえば俺という魂の欠けたパズルのピースの
ようなものだそうだ。

「あの子が一番に望む事はまーくんと一つになる事。それ以上の望みなんてあの子には無かった筈よ」

「・・・」

その願いは昨夜至極簡単に叶えられてしまった。俺を望んだ青空と青空を受け入れた俺。その条件を満たただけで俺と青空は簡単に融合に成功し――、一つの魂として成立させた。

「融合したって言っても別に青空の記憶なんかは流れ込んできたりしないなあ」

「融合したと言ってもメインはあくまで、まーくんだからね。あの子の記憶の引き出し方も時間がある時にでも教えてあげるわ」

「よ、よろしく」

そつえばエリナ同様、彼女も昔から俺の教育には何気に熱心だった。

「さて。それじゃそろそろ出発の時間だけど由沙子は本当に来ないの？」

「しつこいわね！私は行かないっただ行かない！」

昨夜。俺と青空が融合した後、話は異世界の事にまで及んだ。ユサリレイシアは俺の決意を知っていて異世界へと戻る協力をしてくれる事になったが由沙子は頑なにそれを拒んでいた。

「あなたの母親として無理強いはいないけれど一人の女としては忠告させて貰うわ。意地を張るのも程々にしておきなさい」

「・・・煩いわよ」

「まあ今のあなたなら私と連絡を取る手段位なら使える筈だから気が変わったら連絡してきなさい」

「大きなお世話よ！」

昨夜から由沙子は頑なな態度で意地を張っているだけかと思っていたが、ひよつとすると彼女なりに悩んでいるだけなのかもしれない。だとすると連絡手段を確保しておくユサリレイシアの判断は正解なのだろう。

「さてと。それじゃ出発の前に・・・」

ポンと手を叩いてからユサリレイシアはそつと俺に何かを羽織らせた。それは白い清潔感のある外套だったのだが――。

「私からの選別よ。研究所に残っていた材料で作った特別製だから、きつとまーくんの役に立つてくれるわ」

「それは良いんだけど、なんか女物っぽくない？」

「気にしない気にしない」

軽い調子でユサリレイシアは俺に正面から近寄ってギュツと俺を抱きしめると共にその身を粒子に変えて俺の中へと入って――融合した。

『今度は私の声が聞こえるよね？』

「ああ。大丈夫だ」

ユサリレイシアは俺を待続けた間、様々な状況を考えて色々細工してきたようだ。

『それでは空間移動魔術の発動をサポートします』

青空とユサリレイシアの肉体――『砲戦』と『中戦』に内蔵された魔力増幅回路を並列に繋げて俺の魔力を大幅に増幅してくれるなんて事も。

「それは良いんだけど。今帰っても半年以上時差がある訳で、どうにかならない？」

俺にはエリナのピンチを救う必要がある訳で出来れば半年前のあの時間に戻りたいというのが本音だ。

『んー。出来ない事は無いんだけど難易度が2段階位跳ね上がるから成功率は格段に落ちるわよ？』

「む。でもエリナを助けられないのなら本末転倒だぞ？」

『それじゃまーくんが頑張らないとね。時空間魔術の基本理論は分かっているんでしょ？』

「う」

時空間魔術の名を聞いて俺の顔が無意識に引きつる。エリナに習った魔術の中でも特別に難易度の高い空間系の術だったからだ。もとより空間系の術は難易度が高い上、時空間魔術はその空間系の魔

術の最高何度の術だ。

『私の方でもサポートするから成功率は高い筈だけど重要なのはまーくんの制御力だからね』

「が、頑張る」

俺はユサリレイシアのサポートの元、詠唱を開始して――。

「それじゃ行ってくる」

「ばーか」

由沙子の罵倒を背に時間と空間を翔け抜けていった。

時空間魔術の難易度が高い理由は『時間軸』と『空間軸』の両方を同時に制御しなくてはならないからだ。全く性質の違う二つの座標を同時に制御する必要がある為、難易度が高く――。

「ふぎや！」

だから失敗するのは自明の理だったりする。

『凄いわね。あれだけ完璧にサポートしたのに物の見事に失敗するなんて。流石まーくん』

「あいててて」

ユサリレイシアの言葉通り物の見事に制御にしくじった俺は顔面から地面に激突して叩きつけられ――ムクリと身を起こす。自分で言うのもなんだか人間離れた頑丈さだった。

「失敗って、ここ何処なんだ？」

『さあ？私はちゃんとまーくんの望む時間軸と空間軸を制御したから失敗した以上まーくんの時間軸と空間軸が思い描いた場所の筈よ』
「と言われても」

制御に必死になっていたから失敗した現在地が何処かなんて俺に分かる筈が無い。

『やり直すにしても留まるにして今がいつで、ここが何処なのか分からないと話にならないわ。兎も角、歩き回って情報を集めまし

よ
』

「そうだな」

俺はユサリレイシアの言葉に納得し人が居る場所を目指して歩き出した。

俺が不時着？した場所は鬱蒼とした森の中で、そこから歩き出して2時間、俺は――。

「・・・迷った」

思い切り道に迷っていた。

『だから方向を考えて歩きなさいって言ったのに。適当に歩き回ることになるのよ』

「面目ない」

ユサリレイシアの忠告を聞かなかった俺の失態だった。

「ところでいつまで俺の中に居る訳？出来れば表に出て案内もして貰いたいんだけど」

出発の時からずっとユサリレイシアは俺の中で待機中のままだ。

『ん〜。青空ちゃんと融合したお陰で『魂の欠落』は補えたけど『魂の崩壊』までは完全に修正出来ていないのよ。日常生活位なら兎も角、魂をある程度稼働させるには私がサポートしないと無理は出来ないわ』

「む。暫く出て来られないという事か」

相変わらずユサリレイシアには迷惑を掛けてしまっている。

『気にしないで。私が好きでやっている事だから』

「あ、ああ」

ユサリレイシアに好意を持たれている事は分かっていたが流石に照れる。

「さて。兎も角この森を早く抜けて・・・」

そこまで言った時点で俺は唐突にその場から横に大きく飛びのく！
「ちっ！」

俺がさっきまで居た位置に複数の矢が突き刺さり更にかんりの数

の矢が俺目掛けて放たれていた。

俺はそれを縦横無尽に回避しつつ周囲を領域で検索にかける。

『ちよつとまーくん？そう言えば日乃森は何処に行ったの？』

いつまでも素手に対応している俺を見てユサリレイシアがもつともな事を聞いてくる。

「現在別行動中だ。兎も角、切り抜けるぞ！」

俺はそれだけを答えて複数の弓兵に向かって駆け出す。そして――

「止まれ」

刀を携えた一人の少女が俺の前に立ち塞がっていた。

酷く見覚えのある、その少女――。

『あら？この子・・・』

ユサリレイシアも気付いたのだろう。俺の知っている少女より手足は伸びて体つきも大分女らしくなっては居るが――。

「流瀬・・・か？」

俺の問いに対して流瀬と思わしき少女はいきなり猛烈な勢いで踏み込んでくる！『陽の型』の継承者と納得する鋭い踏み込みと同時に刀を抜刀！俺に唐竹に斬りつけてきた！

「ちよつ！」

流石に慌てるが腐っても俺は世界最強。流瀬の一閃を反射的に白羽取りの要領で受け止める。

そしてギリギリと力の闘ぎ合いの最中。

「貴様。どの面下げて私の前に現れた――

「へ？」

目を吊り上げて何処かで聞いたような台詞で俺を罵倒する流瀬。

「私が、私達がどんな思いで今日まで生きてきた貴様に分かるのか――！」

態度は違うが行動は違うがそれはまるで――。

「花輪とそつくりな事を言うな」

花輪——流花と再会した時と全く同じ台詞だった。

「！」

しかし、それが禁句だと悟ったのは少々遅かったようだ。瞬間、流瀬の体から力が抜けて刀から手を離す。当然、俺の手に流瀬の刀が残り——そして流瀬は拳を握り締めて——。

「ふげっ！」

思い切り横から強烈なフックで俺をぶん殴った！流瀬の刀を持つたまま二転、三転と転がった俺は——。

「痛いぞ。おい」

当然のようにムクリと起き上がって流瀬に抗議した。

が。流瀬はクルリと俺に背を向けてさっさと歩いて行ってしまふ。

「あれ？おい。ちょっと待てってば！刀、刀、刀忘れてるって！」

急いで追いかけるが流瀬は振り返らず早足で歩いて行ってしまふ。仕方が無いので俺はその後をテクテクと追いかけていたのだが——。

「おい」

「ん？」

「いつまで私の後を付いて来るつもりだ」

やっと振り返って俺を見た流瀬には先程の激情は無く以前には無かった冷徹な瞳で俺を見返していた。

「いや刀忘れてるし。色々聞きたい事もあったし」

「ふん」

俺が刀を差し出すと流瀬はつまらなそうに俺から刀を奪い取り鞘に収めてしまふ。そして更に俺に背を向けて歩いて行ってしまふ。

「何なんだ一体？」

『はあ。まーくんって相変わらずニブチンよね』

困惑する俺に対してユサリレイシアはどうやら呆れているらしいかった。

訳が分からないが俺はとりあえず流瀬の後に付いて歩き幾つか必要な事を聞く事にする。

「なあ流瀬」

「何だ」

「お前今年で幾つになった？」

「13だ」

「13。5年か」

時空間魔術の誤差。俺が思い描いた時間から5年もずれてしまっている。

「で、ここは一体何処なんだ？」

次に場所を聞こうとしたのだが流瀬はクルリと振り返りギロリと睨み付けてくる。

「何故そんな事を聞く」

「は？いや道に迷っているからだが」

「・・・そうか」

一瞬、先程の冷たさが緩和したような気がしたが、またムツとした顔に戻り背を向けてテクテクと歩いていつてしまう。

「おい。だから待つてくれって言つの」

「煩い！」

結局、流瀬は俺を無視するように歩いていき俺は仕方なくその後をトボトボと付いて行く事になった。

「お帰りなさい流瀬。この方は？」

「唯の大馬鹿者です。邪魔なら斬り捨てますのでお気になさらず」

「おいおい」

流瀬に付いて行って辿り付いたのは隠し砦のような場所だった。

そこで俺達を迎えたのは17、8歳ほどの綺麗な女性。

「初めまして。私はピアノ「エル」カリスノーツと申します。貴方は？」

「俺は日向正樹だけど・・・」

それにしてもこの女性――。

「あんだ・・・どつかで会った事無かったつけ？」

何故か見覚えがあるような、そうでもないような。

「ある訳無かるう！ピアナ様はカリスノーツ国の第一皇女様だ。貴様などと面識がある筈がない」

「いや。まあ何となくなんだけどな」

しかし確認以前の問題として流瀬が俺を凄じ勢いで睨み付けてくるので確認など取れなかった。

「正確には元皇女です。カリスノーツは2年前に侵略を受けて私は亡命した身ですから」

「ふん」

なんとなく立場はエリナに似ている。しかし――。

「それでこんな所に拠点を作って反乱のチャンスを待っている訳か」
その後の行動は対照的だと思った所で流瀬がいきなり刀を抜き放ち俺の首筋に突きつけてきた。

「間違えるな。我々は『革命軍』だ」

「いや。結局やる事は一緒だし俺的にはどっちでも良いんだが・・・」

「

「『革命軍』だ！」

「わ、分かったから刀を下げろって」

「ふん」

流瀬は刀を納めると俺を無視するように砦の中へと入っていった。
しまった。

「ごめんなさい。普段はあんな無作法をする子ではないのですが」

「そうか？あそこまで酷くはなかったけど普段も無作法だったと思うぞ」

「何か言ったか！」

「いや別に」

地獄耳の流瀬に怒鳴りつけられて俺はスゴスゴと引き下がった。

宿無しだと言ったらピアノは快く俺を迎え入れてくれた。まあいくらか条件を付けられたが働かざるもの食うべからず。適度な手伝い程度ならお安い御用だった。

そして食事が終わわり用意された安作り床に就きながら俺はユサリレイシアと今後の相談をする事にする。

「5年の誤差か。流瀬は兎も角、少々ずれすぎたかな？」

『でもこれ位なら誤差の範囲でしょう。問題は再度時空間魔術を行使してエリナ様の下へ駆けつけるか、それとも・・・』

「それとも？」

『兎に角じっくり考えましょう。文字通り時間はあるみたいだし』
「そうだな」

俺はユサリレイシアに促されるままに結論を後回しにして眠りに就く事にした。

カリスノーツ革命軍での暮らしは狼月で厄介になっていた時と似ているようで異なる。まず俺の仕事が家事手伝いである事は同じだが、その量は格段に多く仕事も比例して忙しくなる。更に革命軍の兵士達は統率と言うものがされていなく柄の悪い連中が多いという事。そして――。

「邪魔だ！」

「うおっ!？」

流瀬が俺を邪険にする為にかなり居心地が悪い。というか普通に洗濯をしていた俺を背中から蹴り飛ばすと言うのは性質が悪い。

「ごめんなさい。作戦前で皆ピリピリしているんです。怒らないで上げてください」

「いや。作戦前と言うかいつもあんな感じだけだね」

この皆に厄介になってから暫く経つが一向に流瀬と打ち解ける事が出来ないで居た。というか話をする機会すら出来ていない。

「今度少し時間を作ってみるか」

折角流瀬と再会出来たのに、これでは余りにも納得がいかないというものだ。

「私の方には話などない！」

が。流瀬に一喝されるだけで話など進んでくれない。というか毎回こんな感じで逃げられてしまうのでは話にならない。

「こら。いつまでも逃げていないで少しは向き合え」

「む。誰が貴様などから逃げるか！」

「じゃあ少しくらい話をしても良いだろう？」

「ふん」

流瀬はそっぽを向いていたが話し合いには応じる気になったらしい。

「で。一体何をそんなに怒っている訳？」

「貴様には関係の無い話だ」

「嘘付け。俺の前でだけピリピリしてるくせに」

以前、遠くから流瀬を見た事があったが俺と向き合う時とは段違いで冷静な顔で話をしていた。

「何か気に入らない事があるならハッキリ言ったらどうなんだ？」

「気に入らない事なら山ほどあるわ！」

と。行き成り俺をキツと睨み付けると大きな声で弾劾し始める。そして――。

「特に気に入らないのは貴様が焼き捨てた奥義書の事だ！しかも欠陥技を人に押し付けおって！」

「欠陥技？」

花輪に技はなし。故に流瀬が言う欠陥技と云えば――。

「真技の事か？」

俺が奥義から編み出した『花輪流刀術・真技』しか当てはまる物はない。

「ああそうだ！あんな欠陥技を真に受けた私が馬鹿だったさ！」

「おいおい。あれの何処に欠陥があるって・・・」

俺は更に流瀬と話し合いを進めようと歩み寄った瞬間――。

「む！」

カンカンカンと警鐘鳴り響いてきた。

「ち！侵入者か！」

それを聞いて流瀬はすっ飛んでいき俺は――。

「やれやれ」

肩を竦めながら流瀬の後を追いかける事にした。

花輪流瀬の事情

正直な話、私は自分が何故こんなにも憤慨しているのか良く分かっていなかった。

再会したあいつは、あいつのままで、そこになんら問題があった訳ではないにも関わらず私はどうしてもあいつを受け入れる事が出来ないで居た。欠陥技である真技の事など本当は些細な問題だと言うのに。

「何があつた！報告しろ！」

警鐘が鳴り響く中、私はある程度予想が付いていながらも近くに居た兵を問い詰める。

「し、侵入者です。北の門が突破されて・・・」

「落ち着いて対処しろ。侵入者は私が排除する！」

侵入者の場所さえ分かれば問題ない。私は急いで北の門へと続く道走りぬけ――血みどろの光景を目撃した。

「貴様らが侵入者か」

敵は6人。いずれも暗殺者風の黒い装束を身に纏い鋭い爪のような武器を血に染めて立っていた。その足元に革命軍の兵士と思わしき者が多数血の海に沈んで倒れていた。

折角掻き集めた兵士を殺された事は頭の片隅に追いやり私は刀を

抜き放ち敵との間合いを計る。

最初に挑んできたのは2人。身を屈め低い態勢で私に迫ってくる——速い！が花輪流刀術・陽の型の使い手が後手に回る訳には行かない。私は迫ってくる2人の敵よりも更に早く踏み込み——斬り捨てた！2人をほぼ同時に。

そして残り4人の敵に向き直り、己の過ちに気付いた。

「魔術師か！？」

6人の格好が同じだからと見誤っていた。こいつらは暗殺者であるのと同時に魔術師でもあったのだ。急いでその場を離れようとするが4人から放たれた無数の火弾は私に高速で迫り——。

「伏せろっ！」

私は背後から突き飛ばされ大きく転倒し、その背後で爆炎が発生し周囲に炎を撒き散らす。

「あ」

助かった。けど今の声は——あいつの物だった。あいつが私を追ってきて、それで私を庇って魔術の直撃を受けて——。

「大丈夫よ」

「え？」

そして、いつの間にか私の背後に美しい女性が居て私の肩を抱くように立っていた。

「私の外套は特別製。この程度の魔術では・・・」

明らかに人間に耐え切れそうにない爆炎の渦巻く炎の中、その炎が——。

「焦げ目一つ付かないわ」

白き外套に押し出され霧散して消える！そして無傷のあいつが——私の師匠、日向正樹が姿を現した。

「借りますね」

そして、いつの間にか私の刀を持っていた女性は日向正樹へと駆け寄り彼の者と重なり合って——、一つになった。残されたのは私の刀を持つ日向正樹のみ。その日向正樹が私の方へと向き直り、言

った。

「良く見ていろ流瀬。真技に欠陥など無い事を証明してやる！」

言つと同時に足元に落ちていた大きな石を刀で斬りつける。そして上から突き刺してレンガ大の大きさにカットされた石を持ち上げる。

何をするつもりかは知らない。けど、やはり私は真技は欠陥技だと思っている。あの技は障害物のある場所や狭い室内でしか使えない限定された技なのだ。この広い場所では真技を発動させる事さえままならない——筈だった。

「行くぞ」

そして彼の者は刀を下に向け突き刺さっていたレンガ大の石が落ちて足の甲の上に乗る。それを4人の敵の頭上へと蹴り上げた！

「え？」

それを目の前でされれば僅かだが視線が石を追う。そして、その刹那の瞬間に私と4人は彼を見失っていた。

「花輪流刀術・陽の型、真技・・・」

「！」

その声に導かれるように私達は上——蹴り上げられたレンガ大の石に『逆さまに着地』している彼の姿を発見して同時に彼がレンガ大の石を踏み碎いた！

真下へと加速する彼。真技において最も重要な重力の助けを借りた初速の確保。そして、その初速を失わないまま地面を蹴り真横へと移動し——。

「え？」

呆気にとられた。本来ならばここから壁や障害物を利用して縦横無尽に移動しながら斬り付ける技なのだ——。

「ど、どうして？」

何もないのに、こんな広い空間じゃ使える訳ないのに、どうやっ

て『何も無い所』を踏み台にしているの？

「あ」

先入観が邪魔をしていた。だから気付くのが遅れてしまった。何も無いと思い込んでいた。だから、そこに『ある物』の存在に気付くのが遅れた。

上空で踏み砕いた石の破片が降り注いでいた事など。

だって誰が想像出来るだろう？ 踏み砕き降り注いだ石の小さな破片を踏み台にして縦横無尽に移動するなんて誰が――。

「は、ははは・・・」

誰でも良い。そんな事はどうでも良かった。重要なのはこの技が欠陥技などではなく――。

「私が、未熟だった」

それだけの話だったという事を確認出来た事。それがとてつもなく嬉しかった。

4人の敵をあっという間に切り刻み、その瞬間やっと地に降り立ち刀を納めた彼は――。

「花輪流刀術・陽の型、真技。その名は・・・その名は何だ流瀬？」

「『乙女』・・・です。師匠様」

世界最強の私の師匠様だった。

第五章

流瀬に真技の使い方を披露して数日――。

「トロトロするな！ まだまだ仕事は残っているだろうが！」

「一々怒鳴らなくても聞こえてるっての」

一見すると流瀬の俺に対する態度に軟化は見られなかった。

日中家事に勤しむ俺を見つけては皮肉交じりに怒鳴りつけては不機嫌そのものの顔で去っていく。そして――。

「・・・あのな」

朝、目が覚めると必ずと言って良いほど俺のベッドに侵入者が居たりする。

「おい。毎日毎日黙って忍び込むなよな」

「んう。もう少し」

俺のベッドの中で気持ち良さそうに眠る侵入者――流瀬を俺は呆れた視線で眺めていた。

日中――というか人目のある場所では頑なに俺を批難するくせに二人きりになると前以上に甘えてくるようになってしまった。

「おい。起きろ流瀬。そろそろ時間だぞ」

俺と流瀬の朝は早い。まあ別の意味での早さなのだが兎も角そろそろ起きなくてはいけない時間だ。しかし俺のベッドがそんなに心地良いのか流瀬はなかなか起きてくれなくてユサユサとゆすって起こす事になる。

「ん」

「起きたか？」

やっと身を起こした流瀬は寝巻き姿で伸びをすると俺に向かって――。

「おはようございます。師匠様」

ニツコリと微笑んだのだった。

「まったく。流瀬は何であんなにギャップがあるんだ」

『可愛くて良いじゃない。きつとまーくん以外に自分の甘えている姿を見られたくないのよ』

「凄い照れ屋なのは知ってたけどね」

流瀬は昔から自分を表現出来る場が無かった為に頑なに意地を張って生きてきた。故に自分が素直に誰かに甘えている姿を見られるのは恥ずかしいと思っているのだろう。

「二重人格的な豹変はどうかと思うけどね」

家事をしながらユサリレイシアに流瀬の事を相談していたのだが多分ユサリレイシアも特に問題だとは思っていないのだろう。久々に和やかな空気の中、俺は洗濯物を干していたのだが――。

「げぼあ！」

トラブルの種というのは勝手に向こうからやってくるものだった。洗濯物を干すのに適した裏庭へと続く扉が吹き飛んで一人の男が転がり出てきた。そして辺りに血を撒き散らしつつ地面をもがく様にして転げ回っている。

「何だ、ありや？」

『さあ？』

訝しげに見ていると裏口から更に数人の男が飛び出してきて、のた打ち回る男を押さえつけては弾き飛ばされている。決して屈強とは言えない体つきの男が数人の男達を同時に弾き飛ばしている、その事実はかなり異様と言って良い。自分の体格の倍はあるうかという男を軽々と、しかも苦しみに転げ回りながら弾き飛ばしているのだ。明らかに普通の状態じゃない。

そんな状態が数分続いたが遂に男は押さえつけられて裏口から引きずられるように連れて行かれてしまった。俺はそんな一連の状況を呆然と見ていたのだが――。

「あ。師匠様」

俺を発見した流瀬が周囲に人が居ない事を確認しつつ俺に擦り寄ってきた。まあ都合が良いといえば都合が良い。

「なあ流瀬」

「はい？」

「ここって何か変な薬の実験でもやっているのか？」

「は？」

訳が分からないという顔の流瀬にさっきの状況を説明するが流瀬は困惑を浮かべるだけで心当たりはない様だった。流瀬はこの幹部的役割を持っていて使える部下も沢山居るみたいだから俺に知られてはいけない事を隠している事も考慮したが――。

「？」

今の流瀬からして俺に隠し事をする器用さを持ち合わせているとは思えない。つまり流瀬は情報を持っていないという事で気になるなら自力で調べる必要があるという事だ。

気になるか否かで言えば正直な話『どうでも良い』というのが俺の感想である。だが今の状況からいうとやはり見過ごせない事態には変わりない。

『流瀬ちゃんが巻き込まれる可能性があるものね』

昼間見た暴走男。あのような事態に流瀬が万が一とはいえ巻き込まれる可能性があるなら流瀬の師匠として見過ごせる事態ではなかった。

「それにしても思ったより広いな」

普段、俺が立ち入りを禁止されている区画は俺が想像していたよりも広い。その内、怪しいと思える区画を虱潰しに探していたのだが――。

『だから、ちゃんと計画を立てて進みなさいと毎回言っているでしょっ。』

「面目ない」

広すぎる場所だとしても道に迷ってしまう悲しい性の俺が居た。

「でも思っただけでも怪しい研究って感じはしないな」

これまで部屋を調査した結果、薬品などは数種発見されたが危険視するほど物もはまだ発見されていない。昼間の事は何かの勘違いだったのかと思い始めた時――。

「・・・」

「どうしたの？」

本当に僅か――中に居るユサリレイシアには感知する事も出来ない小さなレベルで俺は違和感を発見していた。

それは足元。普段、足音など一切立てずに歩く俺だからこそ気付いた小さな違和感。

「地下か？」

「え？でも地下に部屋があるならまーくんの領域に引っかかる筈でしょう？」

そう。本来なら地下に隠し部屋があれば俺が真っ先に気付いている。だが、その俺が真上に直接来て始めて分かる位、微細な違和感しか残していない。

「それって要するに・・・」

「ああ。想像以上に嫌な予感がするな」

俺は丁寧に床を調べ入り口らしき場所を開いた所で益々その確信を高める。

「空間制御。確かにこれならまーくんの領域を誤魔化せるわね」

そこにあつたのは単純な地下室ではなく空間を歪ませて作られた特殊空間だった。本来存在しない場所に存在しない空間を作る。確かにこれなら俺の領域で感知出来ない理由も納得出来る。

「ユサリレイシア。入れるか？」

「ちよつと待つて。入るだけなら簡単だけど出来るなら気付かれずに入りたいわね。ちよつと時間を頂戴」

「頼む」

この手の制御は俺の苦手分野でありユサリレイシアの得意分野だ。俺は安心して彼女に席を譲り――。

『OK。良いわよ』

「はやつ！」

ものの1分と掛からずにその制御を完成させてくれた。

『思ったより幼稚な作りだったからね。私の方が拍子抜けしちゃうぐらい簡単だったわ』

「まあユサリレイシアだし」

ユサリレイシアの頭脳は神族である事を差し引いても群を抜いている。神族随一の頭脳と呼べる彼女の匹敵する存在など――俺の知る限りエリナくらいしか思い当たらない。

兎も角、進入に成功した俺達は早速調査を開始した訳だが――

「予想通り・・・いや予想以上か」

『酷いわね』

あからさまにあちこちに散らばる狂った人間だった者が納められた牢獄。中には見覚えのある兵士なども居て俺の神経が鋭くなっていく。

『人体実験なんてレベルじゃないわ。これは明らかに人間レベルの実験を超えている』

ユサリレイシアの忠告を聞きながら俺は慎重に歩を進め、そして今までの牢獄とは少し違うガラス張りの部屋を見つけ出していた。

その中で眠っていたのは――。

「白い・・・女？」

髪も肌も異常なまでに白く色素が抜け落ちた女だった。

『あの子・・・まさか』

「どうした？」

『いえ。白いのは多分多量の薬を服用させられた副作用だと思うわ。精神よりも先に肉体が廃人に近付いている証拠よ』

「そうか」

何とはなしに白い女を眺めていると不意に女が目覚めたのか
ゆっくりと身を起こし俺の方へと視線を向ける。そして――。

「あ」

俺と目が合うと呆けたようにポカンと口を開け、そして何故かポ
ロポロと涙を流し始めた。

「ど、どうした訳？」

俺が戸惑っているとき白い女はフラフラと立ち上がり俺の方へと歩
み寄ってくる。そしてガラスの壁に手を付いて俺をじっと凝視しな
がら尚も涙を流していた。

「どうなってる？」

『・・・扉を開けましょう。多分この子は重要な鍵を握っていると
思う』

「？」

俺は訳が分からなかったが言われるままにガラスの扉をこじ開け
て白い女を表に出す事にした。

「お久しぶりで、ございます」

いまだポロポロと涙を流し続ける女性は思ったよりもしつかりし
た口調で俺に挨拶をしてきたが――。

「お久しぶり？」

俺には見覚えのないので酷く混乱した。

「そうですね。もう随分前の事ですから。貴方様と狼月でお会いし
たのは」

「狼月で？」

「誰だ？誰だ？誰だ？」

「あの時は自己紹介もせずに失礼いたしました。私は・・・」
俺は頭をフル回転させて――。

「ピアノ」エル「カリスノーツと申します」

「あ！」

その瞬間、ある意味全てが一本の線へと繋がった。

「思い出した。お前・・・カールスが連れてきた狼月の同盟国のお姫様か」

あの時、感謝される気は無いと言った俺に反論をして強引に俺に感謝していった少女。あの時の言葉が印象的だった為、頭の片隅に引っ掛かっていたのだ。

「いや、でもピアノって言ったら」

『どうやら、この実験場の黒幕の姿が見えてきたわね』

「そういう事か」

つまり、この実験場もピアノの幽閉も全て——この皆の指導者、偽ピアノの仕業という事か。

『勿論、この白いピアノさんが偽者という可能性もあるけれど・・・』

『

「それは無い」

俺はその疑いをキツパリと切り捨てる。全体的に白くなってしまっているで直ぐには気付かなかったが目の前のピアノと上に居るピアノは瓜二つだ。

『その根拠は？』

「初めに会った時、俺でさえ見覚えがあると言ったのにあの女は完全に俺とは初対面だと言いつつ切った。俺の記憶力を下回ると考えるより本当に初対面だった考える方が自然だ」

『なるほど』

これでもう疑う余地はない。

「決まりだな。あの偽ピアノが革命軍と称して兵士を募り、ここで実験を繰り返していた訳だ」

『こうなると、あの襲撃なんかも自作自演の可能性が高いわね。複数の兵士が殺されたと見せかけて、この場に連れてきていたのかもしれないわ』

「そうと分かればこの事を暴露してあの女を失脚させ・・・」

「心配には及びません。死人に口無しですから」

「・・・」

少し油断し過ぎていたらしい。いつの間にか俺の背後には偽ピアノが居て複数の兵士達が俺達を取り囲んでいた。

「たかが人間と侮って泳がせすぎってしまったようですね。この研究所にまで進入してくるなんて罰を与えなくてはなりません」

「まさかとは思っていたけれど、この悪趣味な研究所・・・やはりあなたの所業だったみたいね」

そして、いつの間にかユサリレイシアが俺から分離して偽ピアノと対峙していた。

「失礼ですが、どなたでしたかしら？」

「いつまでピアノさんの皮を被っているつもり？神族第四位、神罰級第三位の・・・」

ユサリレイシアにしては珍しく激昂した声で偽ピアノを糾弾するように――。

「エリス!! ヴォワールド!」

その名を叫んでいた。

「まさかアンタが生きていたとはね」

ユサリレイシアの糾弾から数秒。俺は一瞬その声が何処から発せられたのか分からなかった。その位その偽ピアノから発せられた声は今までと掛け離れた口調だったから。

「まあアンタのその惨めつたらしい姿を見たらハッキリ言って同情したわ。あの神族の頭脳とさえ呼ばれたアンタが人間と仲良しごっこしている様は笑う気も起きなかったもの」

余裕ぶった嫌味臭い口調で偽ピアノ――エリスはユサリレイシア

を挑発してくる。

「今だったら土下座する程度で見逃してあげても良いわよ。元神罰級第一位のユサリレイシア様」

「神罰級第二位になった位で随分天狗になっているわね」

「お生憎様。今の私は神罰級第一位なの」

「な!？」

その言葉にユサリレイシアの方が動揺を漏らす。

「まさか、あなたメネシアにまで」

「さうで。どうかしら? まあ、ここで死ぬ人には関係無いけどね」

そしてエリスの姿が瞬間的に遠ざかる。

「そうそう。良い機会だからこの実験施設は放棄する事にするわ。」

十分なデータは取れたし計画は次の段階に入る事になるしね」

そしてパチンと指を鳴らす。

「あんた達の相手はこの失敗作にして貰うわ。せいぜい頑張りなさい」

エリスが消えると同時に周囲に居た兵士達がいつせいに襲い掛かってくる!

俺の魂の崩壊を心配しての事だろう。ユサリレイシアは戦いが始まると同時に俺と融合してサポートに回ってくれた。

『不味いわ、まーくん。この兵士達は神族により薬物強化されている』

「その割に動きは大して速くない」

迫ってくる兵士の頭を俺は拳で一撃の元粉碎する! だが――。

「うげっ!」

粉碎した頭が煙を出すほどの勢いで再生する。その様子はハッキリ言って吐き気を催すほど気持ち悪いものだった。

『恐らく、この兵士達は薬物強化と同時に大量の魔力を注入されているわ。その魔力がある限り半永久的に再生をしてしまう』

「不死身って事か?」

『そこまでは行かないけれど魔力がある限り延々と再生を繰り返してくるでしょうね』

「何か手はないのか！」

周囲に群がる兵士達を退けながら俺はユサリレイシアに聞いたです。

『魔力攻撃なら兵士達の魔力を直接相殺出来るから大幅に魔力を消耗させられるけど、まーくんの魔力がそこまで持つかどうか』

目の前に居る兵士だけで十分な頭数だというのに、まだまだ増える可能性がある以上どの道俺の魔力だけでは全然足りない。

「絶体絶命って事かよ」

神族エリスが敷いただけあつて俺達が生き延びる可能性は皆無と言っても過言ではない。俺に手は残っているが、この場面ですべて良いものかどうか――。

「大丈夫です」

俺の迷いを読み取ったようにその声は俺の背後から響いてきた。

「大丈夫。あなたは『カリスノーツの英雄』だから。私は……」
そして本当に腹が立ってしまう位その瞳は――。

「あなたの勝利を信じています」

俺に絶対の信頼を寄せていた。

「随分無責任な事を言ってくれるな。この場面でそんな事を言われたら……」

グツと目の前に迫る兵士どもを睨み付ける。

「何が何でも勝たなくちゃいけなくなるだろうが！」

そして俺の迷いを断ち切るのに十分な力を備えていた。

「ウジャウジャ、ウジャウジャ……」

俺の想定したとおり兵士達は後から後から沸いて出るようにドンドン表れてきた。その兵士達を俺は――。

「鬱陶しいんだよ――！」

銀色の鎖で薙ぎ払う！神具『因果の鎖』レテリナス・チェイン。触れた物全てに対して肉体、精神、魂にまで極限までダメージを与える鎖は兵士達を薙ぎ払う度に、その兵士を次々と塵へと変えていく。

『まーくん。いつの間にこんな高位神具を・・・』

「悪いがまだ秘密だ。一気に片付ける！」

伸縮自在の特性を持つ鎖は更に俺の意思に反応して次々と兵士達を薙ぎ払い塵に変えていく。結果、恐ろしく短時間で兵士達を全滅させる事が出来たのだが――。

「見事、見事。流石にエリスが僕を残しているほどの相手だけはある」

パチパチと拍手をしながら登場した『そいつ』は不気味な笑顔を貼り付けながら俺の前に歩み寄ってきた。

「エリスってのは案外用心深い奴みたいだな」

『腐っても神族だからね。頭脳明晰とは言えないけれど頭は悪くないわ。出世欲が強く過ぎて暴走しやすいけどね』

「間違っても友達にはしたくないタイプだなっと！」

言葉の途中で俺は銀色の鎖を射出する！が――。

「がっ！」

気が付いたら俺は背後から首筋に猛烈な打撃を受けて意識が飛びそうになっていた。飛びそうになる意識を無理矢理繋ぎとめ前のめに倒れかけた体勢を無理矢理足を踏ん張って堪え即座に背後を振り返ると『そいつ』が俺から距離を取りながらニヤニヤと笑っている所だった。

「案外丈夫なんだね。今ので決まったかと思っただけど持ち直されるとはね」

「ちっ！」

こいつ今何をしゃがった。訳が分からないまま再度攻撃が開始される。今度は真正面から突進してくる『そいつ』。動きそのものは低レベル。故に動きに合わせて俺は銀色の鎖を振るい――。

「ぐがつ！」

気が付いたらまた背後から強烈な打撃を食らっていた。

まただ。気が付いたら領域すらも越えて背後から打撃を食らっている。何をされているのか分からないが、このままだとまずい。

『これはまさか・・・能力者？』

「能力者？」

「ほお。案外物知りなんだね」

俺の呟きを聞きつけたのか『そいつ』は感心するように頷く。

「ご明察。僕は『能力者』なのさ。何の能力かは秘密だけだね」

『能力者とは特定の異能の力を身に付けた者の総称よ。まさかエリスが人工的に能力者を生み出す事に成功していたなんて』

『そいつ』の言葉を無視してユサリレイシアが俺に情報をくれる。が正直そんな事が分かってても領域を越えてくる奴の対処法が思いつく訳ではない。

『先程の攻撃手段から考えて恐らく彼の能力は『時間停止』だと思うわ』

時間停止。要するに時を止める能力者って事か。それならさっきの行き成り領域を飛び越えて攻撃してきたのも納得がいくが――それってほとんど無敵じゃないのか？

『いいえ。『時間停止』は決して万能でもなければ無敵でもないわ。弱点は消耗が異常に大きい事。限定空間しか時間を止められない事。人間レベルで考えれば一度に止められる限界時間は4秒弱、実際に止めていられる時間は1秒前後。そして範囲は半径10メートル前後の筈よ』

「なるほど」

ユサリレイシアの情報は有益だ。これだけの情報があれば――。『でも気をつけて。『時間停止』は恐らくまーくんとは相性が最悪

の筈だから』

「心配ない。こいつは・・・すぐにぶちのめす！」
十分勝機を見出せる。

「はっは。面白い事を言うな。一体どうやって僕を攻略するつもりなんだい？」

「そんな事をわざわざ敵に教えてやる義理はない」

俺は右の拳を握り締め機会を伺う。

「まあハツタリに付き合うほど僕は暇じゃないんで・・・」

言葉の途中で『そいつ』の姿が掻き消える。

先程までと同様背後から衝撃！だが俺にとっては——今が勝機！

「おおおお

——！！！」

握り締めていた拳を俺は裂帛の気合と共に——足元の『石の床』

へと突き立てる！

「な！？」

爆発する床。そして飛び散る破片。それと同時に——。

「ぐはっ！」

『そいつ』も一緒に弾け飛んでいた。

『なるほど。時間停止中に間合いを詰めて攻撃。その後、時間停止を解除して距離を取る戦法だというなら時間停止解除の直後に全周囲へと攻撃すれば逃げられない。考えたわね、まーくん』

まあ、あれだけ情報を貰えば対処法の一つや二つ馬鹿でも思いつく。

『でも、奇襲は一撃必倒が基本。次に同じ手は通じないわよ』

ユサリレイシアの厳しい言葉は『そいつ』が当然のように起き上がり俺を物凄い視線で睨み付けている事に対しての警告なのだろう。だが——。

「どうかな？」

俺は小型のクレーターの出来た床から真新しい床のある場所へと

移動し先程と同じように拳を握り締める。

「舐めるなあ」

「！！！！」

そんな俺に激昂した『そいつ』が先程とは比べ物にならない速度で突っ込んでくる！それに合わせ俺は先程と同じように拳を床に――

『待つてまーくん！まだ早い！』

渾身の力で叩き付けた！

「がはあ！がはあ！ば、馬鹿な！」

『そいつ』は恐らく俺と同じくタイミングを見計らっていたのだろう。本来、俺の拳は時間停止終了直後に床を砕かなくてはならないだから『そいつ』は俺が床を撃った直後のタイミングで時間停止をしかてきた。そして俺へと直接攻撃をせずに床の全周囲攻撃の範囲から離脱を図る気だったのだと思う。

「は、謀りやがったな！！！」

だから計算外だったのはその範囲。一度目のクレーターはせいぜい半径3〜4メートルとった所だが、2度目のクレーターは優に20メートルを超える範囲を誇っていた。

『なるほどね。1度目は加減して2度目は全力で叩いた訳か。10メートル限定の時間停止の連続使用をして限界以上の力を使った為、暫く時間を止める事は出来ないわね』

一度目に全力で撃ち込む事も考えたが時間停止を使われない可能性があったので却下した。先程の一撃目で確認したが『そいつ』も神族の薬物強化と魔力注入を受けて異常な再生力をもっていたので物理的な攻撃は決定的な効果にはならないと踏んだのだ。

『皮肉な話、理性と痛覚のある完成体だった為に痛みを恐れて後先考えずに能力を使ってしまったみたいね。多分一撃目の攻撃がよほど効いていたんでしょう』

「そこまでは考えていなかったが、これで丸裸だ」

「ば、馬鹿な。この俺が、こんな所で」

そして俺は一片の躊躇も容赦もなく、名前も知らない『そいつ』を銀色の鎖で塵へと変えた。

「ふう」

戦いが終わると俺は白い女——本物のピアノの方へと向き直る。

「ユサリレイシア。ピアノの体は大丈夫なのか？」

「ちよつと待つて。今調べるわ」

俺から分離したユサリレイシアはピアノの体を丁寧に調べ始める。その結果——。

「大丈夫みたいね。薬の副作用で体の色素は抜けてしまっているけれど精神は驚くほど正常を保っているわ」

「……どういう意味？」

「つまり、この子は薬になんて負けなかったのよ。恐ろしく強い精神の持ち主だわ。エリスがこの子を生かしておいたのもこの強い精神に目を付けていたのでしょう」

「へえ」

まあ以前に会ったピアノも小さかった割に随分と大人びていたが。「先程は取り乱してしまつて申し訳ありません。ずっとここに幽閉されていたので心が弱っていました」

「気にするな。それより、いくつか聞きたい事があるんだが」

「はい。なんなりと」

やはりと言うか、なんと言うかピアノの精神が強いといったユサリレイシアの言葉に納得してしまう。それくらいピアノの態度は芯が通っていた。

「じゃあ聞くけど何でカリスノーツは侵略なんて受けたんだ？」

「それは……私が不甲斐ないばかりに……」

「そういう事を聞いているんじゃない。俺が聞きたいのは狼月はどうした？つて事だ」

ピアノがああの時の少女であるならば、この国——カリスノーツは

狼月の一番の同盟国の筈だ。そのカリスノーツが侵略を受けてあの狼月が黙って見ている筈がない。だが――。

「狼月は3年程前から弱体の傾向にあり2年前に侵略を受けた時にはもう以前の見る影も無いほどに・・・」

現実とは時として残酷な一面を見せる。

「あの狼月がか？カールースが居てそんな事が・・・」

「カールース様を初め、主立った面子は3年前に引退して一線を退いてしまわれました。狼月の衰退はそれが一番の原因かと」

「・・・」

「どうやら俺は次にカールースの馬鹿に会いに行かなくてはならないようだ。」

第六章

少年剣士・ムナイの事情

大陸最強の男、カルースⅡマクドエルに弟子入りを志願して早1年。剣は教わっていないが何故か妙に充実して毎日を過ごしている自分を発見していた。

マクドエル一家の家は四方を森に囲まれた場所に建てられていて滅多に人が尋ねてくる事はない。しかもカルースさんに聞いた話この場所を知っているのは片手で足りるくらいの人間だけらしい。

その家で剣術修行——ではなく家事手伝いをしている僕はムナイⅡトキト。一応一年程前にこの場所を偶然に発見。そしてカルースさんに弟子入りを志願したのだが今の今まで剣をケの字も教えて貰った記憶がない。

まあこの家での生活はそれなりに充実しているので文句は無いしカルースさんの事情も知っているつもりなので今更無理に剣を習おうとも思わなかった。

そんなある日。

カルースさんの奥さんであるソフィアさんと、その娘さん達が町へ出かけて行った日の事だ。ソフィアさんが町へ出かける理由は一応買い物という事になっているが本当の目的は娘さん達を遊ばせるのが目的なのだろう。ここは広い土地はあっても子供が自由に遊べるような場所は皆無と言って良い居場所だから。

だから今日は僕とカルースさんしか家に居ないのだが——。

「あれ？起きてきて大丈夫なんですか？」

「ああ。今日は気分が良いし・・・なんとなく、な」

カルースさんは普段滅多に表に出ない人なのだが何だか今日は随分と楽しそうで本人の言うとおり調子が良いのかも知れない。

「ソフィアは？」

「あ、はい。娘さん達と町に。帰ってくるのは夕方になるそうです」
「そうか」

そう答えたカルースさんは何故か笑っているような気がした。

そんないつも通りのボンヤリした思考に耽っていると不意に家に周囲に張り巡らされた板がガラランガラんと音を立てて警鐘を鳴らす。
「え？」

この場所には滅多に人が来ない。だからという訳ではないが、もし人がきた時はそれを知らせる為の仕掛けが施されている。以前にもソフィアさん達の帰宅する時に娘さんがこの警鐘を鳴らしてしまった事があつたのだが――。

「侵入者ですかね？」

「ソフィアが帰るのは夕方なんだろう？ だったら、そう捕らえる方が自然だな」

久々に少しだけ僕は警戒心を高める。何故なら一年前、僕がこの場に辿り着いてから初めての侵入者なのだ。

心持ち力み気味に構えながら僕は侵入者の到着を今か今かと待ち――。

「・・・着ませんね」

2時間が過ぎた。

「なに。道にでも迷ってるんだろ」

「は、はあ」

侵入者の接近を知らせる仕掛けから、ここまでの距離はどう控えめに見ても30分は掛からない。その道のりを2時間掛けてまだ辿りつけないという事は想像以上の方向音痴という事になる。

「大した相手じゃないかもしれませんね」

「どうかな？ 俺の知り合いには方向音痴の癖に世界最強という馬鹿一人居る位だしな」

「は？」

カルースさんの言葉の意味は分からなかったが、その言葉の真意はすぐに証明された。待ちに待った侵入者が遂に姿を現し――。

「だから言っただけではないですか！ 出発前に方向を確認してから道を進むべきだと！」

「面目ない」

僕をこれ以上なく拍子抜けさせた。

だって現れたのはたった二人。異国風の服を纏った男と少女。しかもその男は少女に怒られてペコペコ頭を下げているのだ。迫力が無いにも程がある。しかし――。

「きたか」

「カルースさんのお知り合いですか？」

「さてな」

どうやらカルースさんの予想を違わぬ相手だったらしい。

その二人組は僕達の傍まで来ると途端少女の方が態度を変えて丁寧にお辞儀をした。

「お久しぶりです。カルース殿」

「流瀬か。大きくなったな」

流瀬と呼ばれた少女には僕の方も聞き覚えがあった。確かカルースさんのこの住居を知る一人の筈だ。そしてカルースさんはもう一人の方へと視線を向ける。

「よ」

その男は流瀬という少女とは対象に礼儀の何もあつたものではない片手を挙げる軽い挨拶をしてきた。しかし、それに対するカルースさんの返答は――。

「相変わらず間抜け面してやがるな、お前は」

男以上に無礼な言葉使いだった。

「で。今更ノコノコ何をしにきやがった？」

カルースさんの言動は更にエスカレートし――。

「そうだな。以前に着かなかつた決着を付けにきたというのはどう

だ？」

「面白れえ」

男の言葉で更に物騒な話へとグングン上昇していった。

「ちょ！何言っているんですか！」

僕は焦り、睨み合う二人を止めようと尽力するが――。

「ま。冗談はこれくらいにしてだ」

「だな」

「え？」

僕が呆氣に取られてしまふくらいあっさりとピリピリした空気は霧散してしまった。

「とりあえず一発ぶん殴ってやりたい所だが条件次第では勘弁してやらんでもない。そもそも、お前には言いたい事が山ほどあるからな」

「奇遇だな。俺もお前には言いたい事が山ほどあったんだ」

そしてカルースさんは僕が見た事もないような意地悪な――そして楽しそうな顔で男を家の中へと招きいれていた。

「ムナト。居間の棚に酒があっただろう。アレを持ってきてくれ。」

グラスも二つ付けてな」

「え？でも、あれは・・・」

「良いから持つて来い」

「は、はあ」

そして僕は言われるままにとっておきの酒を――普通ではお目に掛かれない高級な酒をカルースさんの部屋へと運ぶ事になったのだ。つた。

「さてと。説教食らわす前にとりあえず舌を潤すか」

カルースさんは当然のように酒の蓋を開けるとグラスにトクトクと注いで行く。

「ほれ」

そして、その酒を渡された男は遠慮も無しに自分のグラスの中に

も酒を山盛りに注いでいった。そして静かにグラスを鳴らした後――

「え？」

男は一気にその酒を喉に流し込んでいった。

酒と言ってもかなり種類があるらしく、その酒はかなり濃い部類に分けられる物だと聞いた事がある。その酒を薄める事もなく、あの量を一気に飲み干すなんて――。

「ぶは〜」

「かつつか！良い飲みっぷりじゃね〜か」
それに対抗してカルースさんも――。

「ちょ！カルールさん、何を・・・」

「ムナト。ついでにツマミでも持ってきてくれ。酒だけだと物足りないからな」

「で、でも」

「良いから持ってこい」

「は、はい」

僕は渋々と部屋を出て台所に移動してツマミになりそうなものを探す。でも正直不安で仕方ないというのが本音だった。

そうして用意したツマミを持って部屋を戻ろうとする途中で――。

「おい」

あの少女――流瀬に呼び止められた。さっき会った時とは違い威圧感のある刃物のような鋭い視線で僕を睨んでいる。

「な、何？」

「暫く私の相手をしろ」

「え？でも僕はこれをカルースさんに・・・」

「黙れ。貴様の意見など聞いていない」

「・・・」

理不尽ではあると思ったし不条理であるとも思った。でも、この少女は何故か有無言わせぬ迫力を感じさせていて逆らう事が出来なかった。

相手をしろと言われたものの流瀬は何をするでもなく僕を正面に座らせた後、黙って目を瞑っているだけだった。居心地が悪いといえば、これほど居心地の悪いものもない。僕は始終キョロキョロと落ち着きなく視線を彷徨わせていた。

「・・・もう良いぞ」

「え？」

そして何の前触れもなく流瀬は僕を解放した。拘束時間は約20分ほどだろうか？

僕は怪訝に思いつつカルースさんの部屋へと入り――、一人で酒を煽る男の姿を発見した。

「あれ？」

一瞬、部屋には男しか居ないような気がして不安に思ったがカルースさんはベッドに横になって眠っているようだった。無理に酒を飲んだ為に眠くなったのかもしれない。僕はテーブルにツマミを置くと毛布を持ってカルースさんに近付き――。

「触るな」

男に静止を掛けられていた。

「え？でもこのままじゃ風邪を・・・」

「風邪などひかん。ひく訳がない」

「あ」

スーッと自分の体温が下がるのを自覚する。

カルースさんが何故普段表に出ないのか。何故カルースさんが酒を飲む事に僕が過剰に反応したのか。そして何故カルースさんではなくソフィアさんが買出しに出かけているのか。僕はその理由を知っていた筈だった。

「嘘・・・だろ？」

カルースさんは病に掛かっていた。重度の高い病で普段は歩くどころか起き上がる事さえ出来ない病だ。無論、酒などもつての外だ。しかも――しかもよりによってソフィアさんの居ないこんな時に――

」。

「ただいま」

「！」

その声に全身の神経が反応して僕はカルースさんの部屋を飛び出していた！この家に帰ってくる人といえばソフィアさんとその娘さん以外にない。だから僕はイの一番のソフィアさんの元へ駆けつけ――。

「ソ、ソ、ソフィアさん！カ、カルースさんが！」

「！」

僕の慌てよう。そして尋常ではない取り乱し方から察したのだろう。ソフィアさんは顔を青ざめさせて荷物を取り落とすと急いでカルースさんの部屋へと入っていった。

僕もその後次いで部屋へと入り――居たのはやはり一人で酒を煽る男一人だった。それを認識した時、僕は猛烈に腹が立ってきた。この男が来なければ、この男が酒を飲ませなければ――。

「あんた、何やってるんだ！こんな時に！」

だから僕が怒鳴る事に誰にも責められる謂れは無かった。無かった筈だった。なのに――。

「そっか」

異常なまでに穏やかな、そして安堵を含んだソフィアさんの声が部屋に響いていた。

「間に合っただんだ」

だからなのだろうか？僕は自分が怒鳴りつけた事に対して酷く罪悪感を覚えてしまっている。そして、そんな僕を完全に無視する形で男はソフィアさんへとカルースさんが使っていたグラスを放り投げる。そして、それを受け取ったソフィアさんに――。

「飲むだろ？この酒・・・一人で飲むには多すぎるんだ。手伝ってくれ」

「ええ」

ゆっくりと酒を注いでいった。

訳が分からず部屋から逃げ出した僕は頭がパンクしそうになっていた。一体何が起こっているのかまるで理解出来ない。

「どういう事なんだ一体。あいつは一体何者で、一体何をしにきたんだ！」

その僕の叫びを聞きつけたのは――。

「少しは落ち着け。私に分かる範囲で説明してやる」

また流瀬という少女だった。

「カルース殿が余命幾許も無い事は一目見て分かった。以前のカルース殿を知っていれば一目瞭然だからな」

「じゃ、じゃあ何故あんな無茶をさせて・・・」

「それと同時にカルース殿が既に限界を超えている事も分かったからだ」

「？」

僕の頭は更に混乱の渦へと飲み込まれていく。

「はつきり言えばカルース殿の余命などつくの昔に使い尽くされていたのだ。いつ死んでもおかしくない・・・いや、生きている事がおかしいような容態だった」

「嘘だ。だってカルースさん毎日笑って・・・」

「ソフィア殿やお前の居る前で苦しみにもがく様など見せる御仁ではない。いや、だからこそソフィア殿の前では逝く事が出来ず、またソフィア殿を残して逝く事に必死で抗っていたのだろう」

「じゃあ何故酒なんて・・・」

「師匠様がきたからな」

「え？」

師匠様とはあの男の事だろうか？

「カルース殿とて嫌でも分かっていたのだろう。自分が長く持たない事を。だから師匠様を待っていたのだ」

何故と聞くのは無粋だと悟った。カルースさんがそこまで信用した相手を僕が疑う事など出来る訳がない。

「でも何もソフィアさんが居ない時に来なくても・・・」

「言っただろう。ソフィア殿が居てはカルース殿は逝けないと。今の状況こそがもっとも理想的な展開だったのだ」

「・・・」

僕は一年もここで生活してきたのに。なのに、なんでこんな傍觀者の扱いを受けなきゃいけないんだ。

「来い！」

そんな僕の思いを感じ取ったのか流瀬という少女は僕の腕を引き台所からグラスを二つ持ち出してカルースさんの部屋へと入っていた。

「師匠様。私達もご相伴に預かりたい！」

相変わらずグイグイ飲んでいた男は流瀬の言葉に酒のビンを傾けてくる。こんな少女にまで酒を飲ませるのかと思っただが自分のグラスに酒を注がれて初めて気付いた。

これは『送り酒』なのだ。

そんな言葉があるのかどうかも知らないが、これはカルースさんを送る為の宴の酒だったのだ。だから残す事は許されず――だから男はグイグイ飲み干していたのだ。こんな強い酒を恐らく普段は酒など無縁であろう男が一人で空けようと頑張っていたのだ。

「頂きます」

だから僕に出来る事といえば注がれた酒を残さず飲み干す事だけだった。

生まれて初めて酒を飲んだ。しかも大量に。なのに俺は二日酔いにはならなかった。当然だろう。酔えない酒に後押しが来る訳がない。

翌朝。

カールスの埋葬や墓を作る作業を終えた後、俺は少しだけ気を緩めていた。

予想以上に大きな喪失感と、そして――。

「面倒な事を押し付けやがって」

カールスが最後に残した言葉に対する憤り。カールスが俺に対して残した言葉はたった一言――。

『後は任せる』

それだけだ。

だということになんと重い言葉か。大体『後』とは一体何を指すと言うのか？残されたソフィアと子供達か？それとも衰退した狼月の事か？それとも、もっと大きな何かの事か？その答えも分からずカールスは逝ってしまった。

「返事も聞かずに逝きやがって。これじゃ・・・」

「すつぽかす訳にはいかないだろ、かな？」

カールスに対する愚痴を述べていると、あの日と同じくソフィアが俺の背後に立っていた。

「俺はお前と違ってまだ色々整理しきれてないんだよ」

振り返った俺の目に映るソフィアは微笑んでいた。少なくともその笑顔は空元気や作り笑いとは違う本当の笑顔そのものだ。何故なら――。

「前にも言っただけど別に私になら甘えても構わないのに」

「今は勘弁してくれ」

昨夜。皆が寝静まった後――ソフィアは泣いた。恥も外聞も脱ぎ捨てて俺の腕の中で存分に泣き腫らした。故にソフィアは既に立ち直っている。否、とつくの昔に覚悟は出来ていて、その上で――。

「私達の面倒を見てくれるんでしょ？」

しっかりと自分の要求を突き通して来たのだ。

「どうでも良いけどソフィア随分若くないか？」

「ん」。誰かのお薬のお陰ですこぶる元気だからね。あの薬に不老長寿の効果でもあったんじゃない？」

話を逸らそうとした話題だったがどうやら問屋が卸さないらしい。しかし――。

「さて。それじゃ子供達を紹介するわね」
「？」

何故か俺の返事を聞く前にソフィアの方から話題を逸らしてきた。まあ兎も角ソフィアに引かれるまま連れられて家の前で待機された俺にソフィアは娘を紹介してきた。

「この子が紅葉よ」

「知ってるって。俺が命名したんだから」

紅葉は5歳。当然だが俺の知っていた赤ん坊ではなかったが、なんとなく面影がある女の子に育っていた。そして、その紅葉の後ろに隠れるようにもう一人――。

「何だ？もう一人産んでいたのか？」

「ええ。言っただけでしょう。子供『達』を紹介するって」

「ああ。そう言えば言っただ。で、その子の名前は？」

「この子の名前はね……」

俺は何気なく聞いたつもりだったその子の名前は――。

「桜って言っの」

「え？」

俺を完全に――完膚なきまで凍りつかせるのに十分な威力を持っていた。俺の頭に過ぎる言葉――。

『関連付ける訳じゃないが俺に子供が出来たら『桜』とでも名付けるかな』

「いや、でも、だって……」

そう、だって――。

「だ、大丈夫だって」

「言い忘れていた事があるけど……」

動揺しまくりの俺とは対照にソフィアは余裕のある顔でニッコリ

と微笑みながら――。

「私って凄く欲張りなの」

俺を地獄の底へと叩きつけてくれた。ガツクリと頂垂れる俺を他所に桜は紅葉の背後からコッソリ俺を伺いながら――。

「お母さん、この人誰？」

ある意味致命的な一言を尋ねてしまった。桜に満面の笑みで笑いかけたソフィアは全く迷う事無く――。

「あなたのお父さんよ」

俺の被保護者の地位を問答無用で？ぎ取っていたのだった。

「まずいよな。まずいよな」

なんと言っても由沙子に続いて二人目だ。

『この場合ってどっちがお姉さんになるのかしらね？年齢的には由沙子の方が上だけど生まれたのは桜ちゃんが先なのよね』

俺の焦りとは裏腹にユサリレイシアは至極落ち着いた感じでどうでも良い事を考えている。

現在、俺達はピアナを交えて狼月へと向かっている最中だ。カルースの遺言を洩々ながら実行に移す為、狼月の再建を実行する為だ。こうなった以上エリナの元へ時空間移動して帰る事は諦め狼月を再建しながら時を待つ選択をせざるを得ない。

「そう言えば・・・」

その為少し余裕が出て、その時点になって俺はやっと一つの疑問点に行き着いていた。

「カリスノーツを侵略した国って一体何処なんだ？」

腐っても狼月の拠点があるカリスノーツを侵略した国。

「まだ言っていないませんでしたか？我が国を侵略せしめた国の名前は・・・」

その国の名前は――。

「クライリンク王国です」

俺に衝撃を呼んだ。

第七章

日向正樹が黒い流砂に飲み込まれ姿を消した後、エリナ「エル」クライリンクは膝を付き絶望に打ちひしがれた——ように思えた。
「・・・して」

「え？」

だから私の耳に届いたその言葉を聞いた時、酷く意外に思った。
何故ならその言葉は——。

「返して！私の正樹を返して！」

絶望に打ちひしがれた彼女ではなく前へと一歩踏み出す為の言葉だったから。彼女は並ぶ者無き天才。そして総じて天才とは逆境に弱い。故にエリナはこの逆境において自力で立ち直る事など出来な
いと思っていた。その私の予想は良い意味で裏切られた。

「強くなれたのですね」

「そんな事はどうでも良いでしょう！正樹を返しなさい！」

別に私が——マホロ「サカツキが日向正樹を奪い取った訳ではないのだけれどエリナからすればきっと私も同罪に見えるのだろう。
「大丈夫です」

だから私は再度その言葉を紡ぎエリナを腕の中へと抱き寄せる。

エリナは抗おうとするが彼女程度の力量に振りほどかれる私ではない。だが——。

「さて。そろそろ始末をつけさせて貰おう」

「何の事でしよう？」

日向正樹を黒い流砂へと落としこんだ張本人——坂木勇玖が私達の方へとゆっくりと歩み寄ってきていた。

「約束ではエリナ様は私に頂ける筈でしたが？」

「悪いがその女は危険だ。生かしておく訳にはいかない」

「約束が違いますか？」

「そうだな」

平然と言い切り、そしてパチンと指を鳴らす。瞬間！私とエリナの真上から巨大なハンマーが強烈な勢いで叩きつけられていた。

「ほお」

私達が今まで居た位置に。

「十分不意を突いたつもりだったが上手く避けるものだな」

「あからさま過ぎますから。不意打ちならば、もう少し策をお練りなさい」

私達を背後から——背後の壁を突き破って襲撃してきたのは一人の男。見覚えは無いが察するに坂木勇玖の言っていた数度の進化に耐えた一人なのだろう。体格は平均より細身なのに恐ろしく巨大なハンマーを片手で振っている時点で普通の人間じゃない。

「さて。大人しくエリナを引き渡せば命だけは助けてやっても良いぞ」

坂木勇玖と巨大なハンマーを持った男。二人に挟まれた私は確かに不利な位置に居るのだろう。

「エリナ様を引き渡す事も、あなたに命乞いをする事も断じてお断り致します」

「ほお。ならどうする？」

「無論。あなた方を倒してこの場から去らせて頂きます」

「ふ。くつくつく」

私の言葉を聞いて坂木勇玖がさも可笑しそうに笑い出す。

「何が可笑しいのですか？笑われるような事を言った覚えは無いのですか」

「いや失敬。唯余りにも見当違いの事を言うので、ついな」

「見当違い？」

「お前は俺とそいつ・・・グレイという名前だが、俺達を倒して脱出すると言いたかったのだろう？」

「ええ。その通りですが？」

「それが見当違いだというんだ。そのグレイは第一段階進化の初期

形態、平たく言えば一番下っ端なのさ」

「・・・つまり」

「そう。この部屋の周辺には第二段階進化以上を果たした奴らが俺の命令を待っている。どの道お前達に逃げ場など無い」

坂木勇玖の声には過信や誇張の類は見られない。故に彼の言っている事は本当の事であり少なくとも坂木勇玖本人はそれを疑って居ないのだと確信する。しかし――。

「それはどうですかね？」

私もまた自信があるのだ。

「あなたの言う事が真実であれば、あなたの命令一つでああなたの直属の部下がこの部屋に雪崩れ込んでくる。その筈ですよね？」

「その通りだ」

「では呼んでみなさい。あなたの部下は果たして来てくれますかね？」

「やれやれ」

坂木勇玖は肩を竦めて嘆息する。

「物量戦は好みじゃないが、お望みとあれば仕方がない。俺の精鋭中の精鋭を披露してやろう」

そして再度坂木勇玖がパチンと指を鳴らし、その瞬間、私達と坂木勇玖の丁度中間にある辺りの扉が勢い良く開かれて――。

「は？」

その場に居た二人から同時にその間の抜けた声が発せられる事になった。何故ならそこにいたのは――。

「精鋭だと？ そんな者はトント見当たらなかったがな」

「同感だ。ここに居たのはどいつもこいつも雑魚ばかり。あれを精鋭などと言っては本当の精鋭に失礼と言うものだ」

そこに居たのは二人の女性。彼女達の名は――。

「花輪流花。故あって助太刀に参上」

「同じく花輪流瀬。一身上の都合により参上した」

少なくとも二人――坂木勇玖とエリナにとっては予想外の人物だ

ったのだろっ。

「さて。あなたの言う精鋭とやらはどうやらお昼寝の最中のようにですね。だからこの私が、マホロ＝サカツキ、改め……」

私は懷に隠し持っていた白い『それ』を引っ張り出し、そして私の全身を包み込むように翻し『白い外套』が一瞬私の姿を覆いお隠す。そして現れたのは――。

「花輪日向正樹が本当の精鋭というものを披露してやろっ」

日向正樹の英姿だった。

「何を驚いている？」

俺は――マホロと称していたユサリレイシアの体から自分の体へと移った俺は勇玖へと指を突きつける。

「お前に飛ばされた俺が帰ってきていた。それだけの話だろうが」
5年前。狼月を立ち直すと同時にクライリンクへの潜入工作としてユサリレイシアの体である『中戦』のテレミリスを借り受けエリナ付きの侍女として潜入した。無論エリナを影ながら守るという役目も兼任するのが目的だ。

「ま……さき？」

「違うよエリナ。今の俺は花輪日向正樹。花輪流刀術の初代正当伝承者だ」

そう名乗りを上げるが俺はゆっくりとエリナを振り返るその体を抱きしめる。

「5年も待った。5年も傍に居たのに、ずっとずっとこの時を待っていた」

「あ」

そう。エリナを長い間待ち続けている人とは他でもない俺の事だ。

「あ。あ・あ・・・」

こうして抱きしめていると良く実感出来る。エリナは弱い。エリナは類稀なき才能を持つてはいるが俺と言う存在に出会ってしまった。そして完全に俺に依存してしまっている。故にエリナは俺から離れると途端に力を失う。俺と共に居れば最強の彼女も俺が居なければ最弱になってしまふ。だから俺はエリナを離さない、離す事が出来ない。

「いつまでやっておるか！敵はまだ居るのだぞ！」

その俺にヤキモチを激昂に変えた流瀬が怒鳴りつけてくるが――。

「敵？何処に敵が居るんだ？」

俺はとぼけた口調で返した。

「目の前に居るだろうが！貴様の目は節穴か！」

「言葉を返すようだが流瀬。そいつらはお前達の『敵』になるような相手なのか？」

それは唯の屁理屈と言えは言い返せるようなものではないだが――
|。

「ふん。馬鹿を言うな。我等に・・・」

『我等に敵は無い！』

俺の花輪と流瀬。2人の声が重なり力強く響き渡る。

「任せるぞ」

「貸し一つだ。忘れるなよ」

流瀬は憤慨した態度を見せているが内心では舞い上がっているようだった。見た目と裏腹に意外に単純だしな。もっとも――。

「師匠様。後で話がありますので心の準備をして置いてください」

「わ、分かってるよ」

それが花輪にまで適応されるとは限らない。俺達と別行動を取り狼月へと向かった花輪を流瀬に迎えに行かせこの場と呼んだ。ここに来るまでに流瀬からある程度事情は聞いている筈だが、やはり俺

が直接話さなければ納得出来るものではないだろう。

「そうと決まればお前達雑魚共の相手など」とと終わらせる」

そして花輪、流瀬共に残つた勇玖とグレイと言う男に刀を同時に突きつけた。

「ふむ。確かに現状は俺の方が不利のようだな」

だが、まだ勇玖には余裕と言うものが見えていた。

「こうなつては仕方ない。この『進化の秘法』の力を少しだけ見せてやる事にするか」

そう言って勇玖は例の緑色の宝石を掲げる。と同時に宝石から光が溢れ――。

「グ！ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ア！！！」

突然グレイという男が苦しみだした！そして――

「うげ」

グレイの体がボコリ、ボコリと膨らみだす。

「その能力は単純な『筋力強化』と言うものだ。だが極限まで進化させれば筋肉が異常増幅を起こすのは当然の帰結だろ？」

勇玖の言葉を信じるならば、この異常な膨らみは筋肉が増加している現象という事になるのだが――。

「とても正気を保っているようには思えんが？」

「だが戦闘力は十分だ。お前達にこいつが倒せるかな？」

「グオオオ！！！グオオオオオオオオオオオオオオオオ
オ！！！」

元のサイズより明らかに3倍以上大きくなったグレイは吼え、同時に何故かこちらへと標的を定める。正気じゃなくても敵の区別位は付くという事か。確かに厄介な化物だが――。

「くだらん」

「この程度の化け物、師匠様の手を煩わせるまでも無い」
花輪と流瀬の心を挫くほどではなかった。

「花輪。最初に言って置くが足手纏いになるようなら容赦なく置いていくぞ」

「誰に物を言っている。くだらん心配をする前に自分の心配でもしておけ」

一見、二人は口調こそ険悪に見えるが、その構えは同時に鞘に収められ、刀を眼前にかざし――。

『花輪流刀術・真技・・・』

同時にその言葉を紡ぎ出した。

本来、俺が花輪と流瀬に伝授したものは『それぞれの型の真技』である。なので本来なら真技を使う場合『花輪流刀術・陽の型』または『花輪流刀術・陰の型』と前置きされる筈なのだが――。
『参る！！』

俺の思考を遮るように花輪と流瀬は同時に化け物となった 그레이 の元へと走り出す。そして先手を取るのは当然『陽の型』の継承者である流瀬。

花輪流刀術・陽の型の特徴は『先の先を取る事』。故に流瀬が後手に回る事などありえない。化け物が反応出来ないほどの神速で飛び込み横薙ぎの一閃を先制する。

「ゴオオオ！！！！ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

それに反応して化け物はその巨大な手を振り上げ――。
「遅い！」

流瀬の先制攻撃第二撃が華麗に決まる。当然だ。『陽の型』の極意とは『先の先』を取り、そして『先の先』で終わらせる事にある。相手に反撃よりも確実に流瀬の攻撃は先手を取る。

が。相手も並々ならぬ化け物。流瀬の攻撃を2度も食らったと言うのに意にも返さず反撃に移り――流瀬の体がクルリと反転した。敵に対して背を向ける。本来ならばそれは戦場ではありえない行

動。だがその化け物の攻撃は――。

「ふん。雑魚め」

流瀬と背中合わせに正面を向いた花輪によって至極あっさりと凌がれていた。

花輪の使う『陰の型』の特徴は『後の先』を取る事。相手の攻撃を捌き、その上で反撃を繰り出すのが特徴だが陰の型の極意は『後の先』を『先の先』に繋げる事。一度捌いた相手に2度も先手を取らせるほど花輪流刀術は甘くない。一度攻撃を仕掛けた相手に二度と攻撃の機会を与えない剣。それが『陰の型』だ。

『陽の型』と『陰の型』。その極意を同時に背中合わせに独楽のように回りながら繰り出す事。恐らく、これこそが二人の考案した花輪流刀術・真技――。

「「「 我ら、『一輪』の花となりて師匠様に仇なす敵を・・・斬る！！」」」

その名も『一輪』。

あっさりと化け物になったグレンを打倒した花輪と流瀬。正直な話をすれば二人の成長は嬉しかったのだが同時に俺は複雑な気分だった。

花輪流刀術・真技『一輪』。

言ってみれば二人の合わせ技なのだが、もし、その技を使った二人と対峙した時、正直俺でも勝てるかどうか怪しいかもしれない。花輪と流瀬。単体なら確実に俺が勝つだろう。恐らく二人同時に相手をして俺が勝つだろう。が。アレを出されて俺が勝てるかというとちょっと自信が無い。

その位二人の合わせ技と言うものは圧倒的だった。

「ち。やはり理性の無い化け物程度では勝てんか」

それが分かっているのかいないのか。勇玖は舌打ちなどを鳴らし
ているが――。

「さて。勝負ありだな。俺達の勝ちだ」

この勝負、勇玖戦というなら既に勝負はついている。

「寝惚けるな。たかが化け物を一匹倒した位で勝ったつもりか？余
興のつもりだったが俺自ら相手をしてやる」

「止めておけ。お前には絶対勝ち目は無い」

「ふん。随分余裕の態度だが教えて貰いたいものだな。俺の何処に
お前に負ける要素がある？」

「分からないなら教えてやるよ。お前が俺に絶対に勝てない理由は
・・・」

俺は自身の纏っていた白い外套を再度翻す！そして現れるのは――
|。

「な！？」

白い外套を纏った『砲戦』のマリーエンスこと――。

「神代青空。推参」

業を背負った日向青空の姿だった。

「な、何でお前がこんなところに・・・！」

「日向正樹と日向青空は元々同一人物。故に一つに戻った今、私が
ここに居る事に何の不思議がありますか？」

「な、何を・・・」

勇玖は混乱している。勇玖の今までの所業は全て青空――日向青
空を手に入れる為の物だ。その青空が今ここで俺として存在してい
る事。勇玖の混乱は当然のものだった。

「忌まわしき神代の家系。その業を忘れない為、私は敢えて『神代』
の名を背負います。故に我が名は『神代青空』。花輪日向正樹改め、
神代青空です」

「に、偽者だ！青空がこんな所に居る筈が無い。偽者に決まっている！」

ここまで決定的な事実を突きつけたのに勇玖は往生際が悪い。

「そこまで言うなら貴方が私の高校入学と共にした行為と言葉を一字一句違わず言葉にして見せましょうか？」

「あ」

勇玖は日向青空に好意を抱いている。それは青空と融合して初めて知った知識ではあるが勇玖の行動理念は全てそこに直結していたのだ。

「それとも偽者だと断じて私を斬りますか？」

「そ、それは・・・」

ここに来て勇玖の余裕というものは完全に切り崩された。そしてガツクリと膝を付き戦意を消失させた。

「さてと」

俺は再度外套を翻して元の自分の体へと身を移し、その上で蹲る勇玖の背後へと視線を向ける。

「そろそろ黒幕が出てきてても良い頃合だと思うが？」

表立つての黒幕は勇玖という事にされているが真実は違う。俺がクライリンクに潜入した本当の理由はカリスノーツの侵略の真相と、そして――。

「唯一の完成体だと思っていたんだけど所詮人間じゃこの程度が限界みたいね」

偽ピアノ——エリスⅡヴォーワールドを追い詰める為の画策だ。

クライリンクがカリスノーツを侵略したと分かった時点でエリスの拠点がクライリンクである事は分かりきっていた。

そのクライリンクに勇玖達が革命を起した——否、起こせたとい

う事はそれにエリスの意図が絡んでいるという証拠に他ならない。
ユサリレイシアの推測では勇玖の才能とエリスの目論みが一致した
結果という話だったが、どうやら正解だったらしい。

現れたエリスは以前ののようにピアノに偽装するでもなく、恐らく
本当に姿で現れたのだろうが――。

「ふん。本体は随分と貧相な体付きだな。ユサリレイシアとは雲泥
の差だ」

「う、煩いわね！あの女の胸がデカ過ぎるのよ！」

前にも思ったが、この女には冷静さというものが欠けている。こ
れだけ簡単に激昂してくれると挑発のし甲斐があるというものだ。

『でも気を付けてね。エリス自身の魔力は以前の私に匹敵するもの
よ』

「分かっている」

その為に5年間も入念に準備をしてきたのだ。俺はスツと右手を
上げて――。

「高位神具『因果の鎖』レテリナス・チェイン」

エリスの言葉にピタリと俺の動きが止まる。

「前はちよつと油断して手を誤ったけど今回は私自身が相手なのよ
？高位神具には十分対策を練らせて貰ったわ」

「ち。貧相な体の癖に用意周到だな」

「大きなお世話よ！」

激昂すると同時に開放されるエリスの魔力。確かにこの魔力、ユ
サリレイシアにも匹敵する強さだ。おまけにこれだけ高密度の魔力
で身体を纏われては確かにレテリナス・チェインも本体に届かない。
本体に届かなければレテリナス・チェインもただの鎖だ。

「私はユサリレイシアと違って面倒な事は大嫌いな。だから即効
で片付けてあげるわ」

そう言ってエリスはある程度の距離を保ったまま右手をかざし魔
力を集める。

『ね。エリスは戦闘技術に自信が無いから遠距離攻撃を選んだですよ？』

「だな」

故に、それは俺の思う壺。

「跳ぶ！サポートを頼む！」

『了解』

俺はエリスが魔力を集め終わる前に行動を――。

「あ」

空間を超えてエリスの零距离まで瞬時に接近した。焦るエリス。そして、あくまで防御体勢を取るエリスの体に左手を添え――。

「エリナ式柔術奥義……」

この奥義を持って――

「秦　一滴！」

打倒する！

「ごぼっ！ごぼっ！」

血――というより光の粒子を吐き出しながらエリスはのたうち回る。いかに魔力が高くと――否、魔力が高いからこそ魔力の超振動を送り込む『秦一滴』は効力を発揮する。己の魔力を自身の防御の為に体内に蓄積させたエリスは格好の餌食だった。

それ故、計算どおり秦一滴はエリスに大ダメージを与え――。

「我らの奥義に敵はない」

俺達は勝利した。

「終わりよ、エリス。ここまでダメージを受ければあなたでも唯では済まないでしょう」

「ごぼっ！ごぼっ！う……ごぼっ！」

粒子を吐き出し続けるエリス。ユサリレイシアの説明ではそれは破損した自身の体を外に排出し新しい体に変えているそうなのだが、ここまでダメージを受けては自分の命を削って修復に回しているようなものだ。簡単には終わらないだろう。

「答えなさいエリス。メネシアは何処？」

メネシアというのは元はユサリレイシアの一つ下、エリスの一つ上に居たユサリレイシアの同僚らしいのだが――。

「甘いわよ、あんた」

突如として苦しんでいたエリスの姿が掻き消える！

「往生際の悪い。その体で私達から逃げ切れると思っっているの？」

「逃げ切れないでしょうね。・・・私一人なら」

その瞬間、その言葉を受けたユサリレイシアが瞬時に青ざめる。

「ま、まさか・・・！」

「言っただでしょう。私が実行していたのは『計画』なのよ。残念ながら私の独断じゃない訳。この意味分かるわよね？」

「拙いわ、まーくん！急いでこの場から・・・」

ユサリレイシアの言葉が終わる前に城が、クライリンクの広大な城が綺麗に吹き飛んでいた。

「手加減はしなかったつもりだが良く生き残れるものだ」

「はあ、はあ、はあ・・・」

魔力を使いすぎた。呼吸が乱れる。息が整わない。

「ま、正樹」

俺の背後で裾をつかむエリナ。気を失った花輪と流瀬。3人を庇った為に俺の魔力はほぼ空になってしまった。

そして、その俺の前に立ちはだかる一人の男――。

「『神王』ユリアス」

その男の名前を畏怖するようにユサリレイシアが発音する。

「それって要するに神族で一番強い奴って事か？」

「ええ。でもエリスなどを基準にしない方が良いわ。神族第一位と第二位の間には天と地ほどの開きがあるから」

「冗談は程々にして貰いたいな」

それは要するにエリスより圧倒的に強いという事だ。

「坂木勇玖がエリスの研究成果である『進化の秘法』を所持していた理由を納得したわ。エリスの独断なら決して手放す筈が無い秘法を坂木勇玖が持っていたのはエリスの背後にもっと大物が居た為だったみたいね」

なるほど。エリス程の欲張り女がその成果を手放していたのには理由があつたという事が。だが今はそんな事よりも――。

「対策は？」

「分からないわ。この5年、エリスの対策は山ほど立てたけれどユリアスを相手にする算段はまるで立てていないわ。正直な話をすれば逃げるのがベスト」

「無理だ」

俺は兎も角、エリナ、花輪、流瀬を連れてこの状況から逃げるのは不可能だ。おまけに魔力が尽きてどう考えてもまともに戦って勝てる可能性は無い。

「ユサリレイシア。兎も角3人を連れてなるべく遠くに逃げてくれ。俺はその時間を稼いで・・・」

「まーくん!!」

「ごふっ！」

気が付いたら腹に腕が突き刺さって貫通していた。

「終わりだ」

神王ユリアスの腕が。

「がは！」

ゴミのように地面に放り投げられた俺は血をあたりに撒き散らしながら転がる。ダメージが大きすぎて出血も洒落にならない。

「まさか貴様のような輩に研究を邪魔されるとは予想外だったが、どの道、進化の研究など唯の副産物に過ぎん」

「な・・・んだと」

進化の研究が副産物？これだけ犠牲を出したというのにメインの研究ではなかったという事か？

「やはり、そういう事なのね」

「ふん。流石に貴様は気付いていたか。伊達に神族の頭脳と呼ばれていた訳ではないらしいな」

訳が分からず立ち上がる事さえも出来ない俺をエリナが必死に治療してくれているのを尻目にユサリレイシアとユリアスの睨み合いが始まる。

「初めて見た時から似すぎていると思っていた。そして人間ではありえない頭脳と才能。これらを踏まえればあなたの目的も自ずと知れるわ」

「ふん。当ててみる」

「あなたの真の研究とは・・・」

恐らく俺が回復するまでの時間稼ぎも含まれているのだろう。ユサリレイシアはなるべく話を伸ばすように会話を誘導しながらチラリと俺を――俺とエリナを見てぎゅっと唇を噛み締める。

「私のコピーを作る事。正確には神族に都合の良いユサリレイシアと同等の能力を持った存在を作り上げる事でしょう」

その言葉を聞いて俺の回復に努めていたエリナがピクリを反応する。

「初めは複製・・・クローンを試そうとしたのでしょうけど神族のクローンは成功率が低い上に劣化が激しく、とても使い物にはならない。だからあなたは私と同等の能力を付与した『人間』を作り上げ私の全能力をコピーした」

「推測だけで良くそこまで真相を導き出せるものだ」

「当然でしょう。才能は元より、性格や感性まで似通っている上に・・・」

不意に俺を治療中のエリナがぎゅっと俺にしがみ付いてきた。そして――。

「同じ人を好きになったのだから」

ユサリレイシアはその致命的な言葉を吐き出した。

「ちょ！待て。それって、もしかして……」

「ええ。エリナ様は私のコピーなのよ。まーくんなら実感出来るでしょうけど彼女の能力は明らかに人間レベルを超えているわ」

「そ、それは……」

心当たりは山ほどあるがエリナがユサリレイシアのコピー？確かにそう考えれば納得出来る事も山ほどあるが――。

「さて。事情が分かったところで、その女を引き渡してもらおうか。その男の命が惜しいならな」

「な……んだと？」

そこで俺は初めてエリナの――そしてユサリレイシアの意図を理解する。今、俺の戦意を削ぐような話をしたのは全部、俺を生かす為の作戦だったのだ。何故ならここでエリナが素直に条件を飲めば俺は――俺だけは確実に助かるからだ。

「折角の手駒だ。有効に使わん手はないだろう？」

「……」

それは、確かに俺を優先するエリナやユサリレイシアの判断としては正しいのかもしれない。だが、それは――。

「……」

俺は傷ついた体を無視して無理矢理身を起こす。そして――。

「無駄よ。魂に私の一部を残してリミッターを掛けているから奥義は使えないわ」

「……」

俺の行動を読んでの事だろう。ユサリレイシアは先手を制して俺に静止を掛けてくる。

「例え貴方に嫌われようと憎まれようと私にとっては貴方が一番大事なのよ。多分エリナ様も」

だからなのだろうか？

こんな人に対して頭に來たのは初めての事だ！

俺は奥義を使用する時よりも更種類の違うに怒りを覚えて居るにも関わらず頭の芯の部分が異常なまでに冷たくなっている事を自覚した。

「すう、はあ、すう、はあ・・・」

腹に大穴を空けたままで俺は深呼吸を繰り返す。時々血が口と腹からこぼれるが無視して深呼吸を続け——右手をその大穴の空いた腹の中へと突っ込んだ！

『な、何を！』

ユサリレイシアとエリナが同時に驚愕して静止を掛けようとしてくるが俺は左手を突き出し二人を阻む。

「お前らが自分の勝手を通すというなら俺も自分の勝手を通すまでだ！」

「だからと言って、そんな事をして何に・・・！」

「アイツをぶちのめす為に力が要るんだ。俺の力だけじゃ足りないでも、どうしてアイツだけは倒さないといけないんだ。だから！」

俺は腹をまさぐる右手に固い感触を掴み取り——。

「力を貸してくれ！月十六夜くつきいざや>!!」

俺の腹の傷口を更に縦に引き裂きながら黒い巨大な剣がその姿を表した。

エピソード

地獄の底の回想

神代家の牢獄はまさに日向正樹にとっては地獄と呼べる場所だった。

暗く光の届かぬ彼の場所で延々と戦い続ける日々。斬っても斬っても蘇る化け物達を相手に日向正樹は善戦した。飲まず食わずで二ヶ月以上もの間、戦い続けた。
そして出会ったのだ。

青空も由沙子も誤解していたようだが一応神代家の牢獄にも食料と呼べるものは存在していた。世界の中心で一日に一つだけ実をつける小さな神木。それが神代家の牢獄の中での唯一の食料原。無論、その実を狙っているのは牢獄中化け物全てと言っても過言ではない。それ位、そこではその木は貴重であり、つける実は一魅力的だった。故に実を手に入れるのは勝者のみ。

その最果てのない戦いに置いて日向正樹は無敗を誇り実を独占した。

そして10年以上も戦い続けた後だろうか？

彼はふと疑問に思ったのだ。何故この神代家の牢獄にこのような木が存在しているのかと。この木は確かに争いの火種にはなっているが明らかに救いの象徴とも言える。

苦しみだけを与える神代家の牢獄に置いて、その木は明らかに異彩だった。

彼はその日からその謎を解く事に意識を向ける時間を取るように

なり——そして、ある日、本当の意味でその木を手に入れる事に成功していた。

そして、その木は形を変え——否、元の姿に戻って俺の魂の内ですっと眠りに就いていた。

それを——。

「第零式オリジナル神具・『希望の剣』月十六夜！」

俺は今解き放っていた。

「何かと思えば。今更神具の一つ位取り出したところで貴様に何が出来るというのだ？」

確かに俺が受けたダメージは半端ではないものであり現在の俺の戦闘力は皆無といって過言ではない。

そして月十六夜にも攻撃の手段という能力は皆無である。

「往生際が悪いのもいい加減にしろ。貴様は唯の人質になって大人しくしていれば良いのだ」

「ユサリレイシア。以前、俺が日乃森を連れていない事に疑問を持つていたな」

「え？」

俺は『神王』ユリアスを完全に無視した形でユサリレイシアに問い掛ける。

「理由は日乃森が神具だったからだ。俺は神具に限定して、どのような神具であっても一定期間以上傍に置いておく事が出来なくなった。だから位では最上位に位置する日乃森よりも使い勝手の良いレリナス・チェインを使っていた」

日乃森——『封神の剣』セウリー・リオンは確かに最上位神具だが、その威力は余りにも術者の魔力に依存しすぎる。だから人間の俺が使うならば日乃森よりもレリナス・チェインの方が威力が出

てしまう。

「目障りだな。もう一つくらい穴を空けて黙らせるか」

俺に無視された事が気に入らなかったのかユリアスは指に光を集めて俺に向かって撃ち出して来た！

今の俺には防ぐ事も避ける事も不可能。故に――。

「馳せ参じよ！汝が名は『無明の盾』アルテリオ・シエル！！」

俺に出来る事は頼る事のみ！

俺の前に現れた不可視の盾は神王の攻撃を明後日の方向へと弾き飛ばす！

「ちい！まだそんな神具を隠し持っていたか！」

苛立つた神王は光の光弾を連続で投げつけてくるが――。

「無駄だ！イージスの異名を取るアルテリオ・シエル。幾ら神王とはいえ簡単に破れはしない！」

この盾こそ、あらゆる攻撃を防ぎきるイージスの盾なのだ。

「だからなんだというのだ？」

しかし神王の力はあらゆる意味で人間を凌駕する。一方向から飛んでくる攻撃なら兎も角、その人間とは桁外れの身体能力からの攻撃を全周囲から織り交ぜて撃たれてはアルテリオ・シエルでは防ぎようがない。故に――。

「馳せ参じよ！汝が名は『神威の鋼線』アミス・ストリングー！」

視認出来ないほどの速さで動かれるなら絡め取るのみ！

「また下らん小細工を！」

俺を中心に蜘蛛の巣のように展開された鋼線は容易く神王を拘束する。この鋼線は柔軟と硬度の両方を兼ね備えていて引き千切ろうとしても伸びるだけで拘束は緩まない。

「……貴様。一体いくつの神具を隠し持っている？」

その俺に流石に怪訝に思ったのだろう。神王は絡め取られながらも無傷の状態で俺に問いを發してきた。

だが、やっと神王の動きを一時的にでも止める事が出来たのだ。

神王の答えには言葉ではなく——行動で答えてやる！

「来たれ！」

俺は月十六夜を天に掲げ——。

「集え！」

力の限り叫ぶ！

「来たれ！来たれ！集え！集え！」

俺が呼ぶ者。俺が集める者。それは——。

「全ての神具達よ——！」

この世に存在する56億3473万4476の全ての神具達である。

「正気か？貴様」

城の廃墟であるこの場所を埋め尽くした神具の山を見て神王が漏らした呟きに——。

「こんな馬鹿な事があつてたまるか——！」

もはや余裕の文字が一切浮かんでいない。それどころか顔を青ざめさせ俺以上に倒れてしまいそうな状態になっていた。

それはそうだろう。なんとと言っても56億以上の神具に包囲されているのだ。

神王の力が幾ら高かろうが、この全ての神具の攻撃を凌ぐ術は無い。

「集え！『神王』ユリアスの防御を突破せんとするものよ！我が右

手に集え！」

そして当然、俺には一片の容赦も躊躇も無い！

「ちい！この神王を舐めるな――

――！！！」

神王の防御を突破する神具と見越しての事だろう。神王は防御ではなく攻撃を持って神具達の攻撃を防ごうという腹らしい。このあたりは確かにエリスとは違うようだが――。

「集え！『神王』ユリアスの攻撃を阻害せんとするものよ！我が左手に集え！」

「き、貴様あ――

――！！！」

それを許すほど俺は優しくもなければ、その余裕もない。

左手に集った神具達はいとも容易く神王の攻撃を凌ぎきり、そして――。

「か・・・は！」

右手に集った神具達は同じ位、容易く神王を貫いていた。

「ば・・・かな。この我が・・・神王がたかが人間に手も足も出ないなどとあって・・・たまるもの・・・」

「集え！『神王』ユリアスに滅びを与えんとするものよ！我が前に集え！」

その呟きを前にしても俺は一切の容赦なく行動を継続する。元より俺の方にも余裕などないのだから。

その俺の前に現れたのは神王に滅びを与える唯一本の剣。その名は――。

「『抹消の剣』ルート・プリンガーよ！月十六夜が伴侶・花輪日向正樹が命ずる！」

視界に移る物を限定だがあらゆる物を抹消する、ある意味最大最強の神具を持つて――。

「や、やめろお

――！！！」

「『神王』ユリアスを、この世界から抹消せよ――！」

「はあ。はあ。はあ。はあ・・・」

限界を超えている。

そもそも俺のダメージだって生きているのが不思議なレベルの重症だ。もう俺には立っている事すら困難で、ふらつき倒れる俺の体を――。

『・・・』

無言の二人の女が支えてくれた。

『謝罪』とは許して貰う為の行為であり許される事を望まない者には不要の産物である。故に二人は無言で俺の治療に専念し――。

「こんな力を隠し持ってたんだ」

「借り物だ。俺の力じゃない」

「でも私達、馬鹿みたいだね」

守るべき対象である俺が神王を一人で打倒してしまったのだから確かに二人からすれば自分達の行為は馬鹿みたいなものだろう。

ある程度治療が終わると、まだ体はだるいが死ぬ心配はないほどには回復してくれた。それを確認した上で――。

「さて。帰るか」

俺は眩き、カリスノーツ方面へと視線を向ける。

今回の一件ではクライリンクに出張滞在という事になっているが現在の俺の拠点は狼月という事になっている。何の因果かカールスの後を引き継いで俺が現団長という有様だ。

俺は未だに気絶中の花輪と流瀬を支え、とりあえず狼月の方向へと歩き出そうとするが――。

『・・・』

エリナとユサリレイシア。二人は黙って俺の後姿を見ているだけだった。

途方を暮れる二人に背を向けたまま俺は歩き出し――。

「早く来ないと置いて行くぞ」

俺の背後から体当たりを掛ける勢いで二人同時に抱きついてきた。素直なのか意固地なのか判断に困る。

基本的にエリナもユサリレイシアも立ち直りの早い方ではないのだが――。

「どういう事かしら？」

「いや、その・・・」

「どういう事かしら？」

「だから・・・」

「どういう事かしら？」

狼月に帰還した途端に違う意味でエリナが元気になりすぎていた。原因は――。

「パパ？このお姉ちゃん誰？」

「さ、桜！良いからあっちに行つててくれ」

桜「マクダエルが元凶という事になっていた。」

「どついつ事かしら？どついつ事かしら？どついつ事かしら？」

「ひい！」

目の据わったエリナだけでも厄介だというのに――。

「そう言えば『私達の娘』の由沙子は元気かしらね？」

「なあ――

――！！！」

こういつ時に限ってユサリレイシアは味方してくれずにエリナに油を注ぐ。

「どついつ事かしら？どついつ事かしら？どついつ事かしら？」

「ひい――

――！！！」

今日も狼月には俺の悲鳴が響き渡っていた。

エピローグ（後書き）

エヌ・オーGIFT1巻と2巻は上下巻のような続き物となっているので1巻で立てた伏線を2巻で回収していくような流れになっています。

これ以降は長くなりますがストーリーとは特に関係ない暴露話ですので読み飛ばしても問題ありません。

作者としては主人公である日向正樹を才能が皆無で、この世で最も不幸な人間としてストーリーを進めるつもりだったのですが作中で一番不幸な立ち位置に立たされてしまったのは実を言うとエリナでした。

第一巻では手塩にかけて育てた日向正樹を流花に横取りされた上メインヒロインの座すら奪われていますし、第二巻でも物語の序盤で日向正樹と引き離された上やっぱりメインヒロインの座はユサリレイシアに持っていかれました。

この背景にはエリナは超優秀という人なのでエリナと行動を共にしては早々事件が起こらない。つまり物語を始める為にはエリナと引き離す事が必須になってしまう法則が出来てしまいました。

優秀という点ではユサリレイシアも同じの筈なのに何故か。

ユサリレイシアと言えば第一巻では『彼女の事情』と『Yの視点』にて登場しています。前者は普通に初対面の彼女であり後者は現代から日向正樹を覗き見している彼女です。

分かりますがYはユサリレイシアの頭文字です。

あと誤解のないように追記しておきますが日向正樹が両親から冷遇されていたのは本人の認識である青空の存在の為ではありません。

彼が冷遇されていたのは神代家の跡取りとして生まれたにも関わらず何の才能も発揮出来ない為に両親ともども追放されてしまい、その為の逆恨みのような事情です。

その状況を打開しようと青空を妹として送り込んだのがユサリレイシアです。

現時点の彼女では日向正樹を救うほどの力を発揮出来ない為、せめて自分が冷遇される言い訳を作れるようにとの配慮です。

これだけ書くとユサリレイシアは随分と青空に冷たいと感じるかもしれませんが、それはズバリその通りです。青空が特別ユサリレイシアに酷い扱いを受けたのではなく、この時点の彼女には既に神族時代の倫理観などなく日向正樹の幸せを第一に考えています。だから日向正樹が自分が冷遇されている理由の言い訳程度にしかならなくとも青空を容赦なく送り込みました。

最後にタイトルの由来などを。

当初、主人公である日向正樹は神代家の最高傑作となるべく作りだされました。事実、神代家の企みは完全に成功しており日向正樹はエリナ以上ユサリレイシア以下の才能を持って生れて来る予定でしたが最後の最後で計算違いが起こります。

日向正樹は神代家ですら意図しない能力者として生まれてきてしまいました。

彼が持つて生れた能力は『大封印体質』。その内にあつてはいかなる力も発揮されないという神代家に相応しい超レアな能力だった訳ですが同時にとてもない弊害が発生しました。

神代家で予定していた全ての才能すらも彼の内に封印され本人が能無しになってしまいました。更に普通の人間が当然のように持つているであろう長所、さらに幸運といった物まで封印されて出来上がったのは『この世で一番不幸な何の才能も持たない凡人以下の人間』。

それを神代家の人間が皮肉を込めて『能無し』↓『NO GIFT』

↓『エヌ・オーGIFT』と命名しました。

ちなみに作中で女性に好意をもたれる事が多い日向正樹のどこが不幸なのか？と思われる人もいるかもしれませんが作者としては女性に好意をもたれる＝幸福ではないと思っていますので、やっぱり日向正樹はこの世で一番不幸な人間なのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1763q/>

エヌ・オーGIFT2

2011年2月9日19時10分発行